全てを捨てて学園黙示録へ

死神亜夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
全てを捨てて学園黙示録へ

【Ｎコード】
Ｎ２２８７Ｏ

【作者名】
死神亜夏

【あらすじ】
何の変哲もない主人公が何の変哲もない日の学校通学中いきなり死んだ高校生……するといきなり真っ白な空間に居たそして目の前にいきなり老人が現れた、そして少年はその老人から驚きの言葉を耳にする……

これは、学園黙示録に転生した主人公を書いた、二次創作です
注意：キーワードにチートと書いてますがあまり、チートはあまりでません。主人公は最強ですが、最強になる時がありません（いま

まででは）

（この小説は編集で全然違う小説になることがあります＞＜）

注意：この小説は次回いつ更新するかわかりません＞＜スイマセン＞＜

作者の勝手な都合で更新を止めることになってしまって本当にスイマセン＞＜

始まりの人生（とき）（前書き）

文才がない……下手な文ですが下手は下手なりに頑張っていくので応援お願いいたします

始まりの人生（とき）

「ふぁ～、今日も学校か～、眠い・・・」

俺はそんな事を言いながら通学路をダラダラと歩いていた

すると突然、【キキィーーー！！！】という音とともに曲がり角から大型トラックが現れた

（あれ、俺死んだ？ハッハッハッ・・・・・）

そして次に目を開けたとき俺は見渡す限り何も無い白い空間にいた

「ハゥロ～♪」

「う、うっわ！！誰だ！？」

「いやぁだねぇそんなに驚く事無いだろ」

目の前の白い髪の毛と白い髭を地面まで伸ばしたおじいさんが意味が分からない事を言ってきた

「だ、誰だよ！！！！お前！！！！こっちの質問に答えろよ！！」

俺は驚きと混乱で怒鳴ってしまった

「ワシか？ワシに名前などない……あえて言うとするなら絶対的な

存在じゃ」

「な、何言ってんだ？おっさん？」

絶対？このおじさん大丈夫か？

「ハッハッ、そうじゃな意味分からんわな、じゃあこう言えばどうじゃワシは「神」と」

絶対的な存在と名乗るおじいさんは高笑いをした後、そう答えた

「クッ、ハッハッ！！や、ヤバい腹痛い、そうか俺死んで変な夢見てんだハッハッ」

そうだ、俺は死んだんだ、だから変な夢を見ているんだ

「夢ではない、正真正銘ワシは神じゃ」

「神なんて居るわけないじゃんか」

俺は呆れた様子で答えた

「少しは目の前の物を見んか！！！！！！！！」

目の前のおじいさんは、目を見開き俺に渇を入れてきた

「うわぁ！？」

「少しは人の意見を聞かんか！」

「あぁ、ゴメン・・」

俺はおじいさんの言っている言葉に反論できなかった

「少年よ、お前は死んだ、だがワシはお前を見捨てたりはせんお前に第二の人生をやる」

「第二の人生？」

「そうじゃ、お前を転生させてやるんじゃ」

「転生……」

「何じゃ、浮かない顔をして？嬉しくないのか？第二の人生じゃぞ、今だかつてあのイエスしかやっておらぬことじゃぞ？」

「転生なんか・・・面白くないじゃん」

俺は神様に言った

「そんなの分かっておるわい♪だから、楽しめる世界に転生させてやるんじゃ♪」

「楽しめる世界？」

「そうじゃ、お前が楽しめる世界じゃ」

「それって一体どこの世界なんだ神？」

「やっと神と認めたかのぅ、それでお前の行く世界は学園黙示録の

世界じゃ！！！！」

「学園黙示録って、あの学園黙示録？何であの世界？？」

「お前の頭のを覗いて決めさせて貰った」

そう言いながら神様は自分の

「えっ、でも漫画の世界だぞ？現実世界じゃないけど？」

「ワシを誰だと思っておる？神じゃぞ！何も無い所から7日でこの世界を創りあげたんじゃぞ！そんな漫画の世界なんて直ぐに創れるわい♪」

「本当か神！！！！本当に学園黙示録の世界に行けるのか！？」

「神に二言は無い！！あ、そうじゃ少年よ、お前に能力をつけてやる！何が良い？」

「能力？チート見たいな物か？」

「ん、まぁ、そんなもんじゃ、で、何が良い？」

「そうだなぁ、一応万能がいい、頭も力も体力も全て常人を上回る人間に」

「ん？それだけか？もっとこう「言ったことが全て現実になる能力を下さい」とか言って来ると思ったのに？」

「いや、そんなに力要らねぇよ……」

「そうかなら武器は要らんか？銃とか」

「武器かぁ、じゃあ妖刀村正「斬龍」をくれ」

「何じゃそれ？」

「一騎当千って言う漫画に出てくる刀だよ、だめか？」

「いや、構わんがぁ銃とかじゃなくて良いのか？」

「良いんだよ、刀カッコいいし！」

「そうか、なら準備しとくわ」

「あぁ、頼む」

「じゃあ、そろそろ時間だ学園黙示録の世界に行って来い！！！！！」

「ああ！、ありがとうな神！！！！」

「二度とここに舞い戻って来るなよ」

「今度会うときは俺が神と同じおじいちゃんになってからだな」

「そうじゃ！では行って来い！！！！！」

そう言ってた神様は天に腕を伸ばしてた

そして神は最後にこう言って

「本当はトラックを間違って君に当てちゃったんだけどね♪」

「お前ぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！」

俺はそう叫び神に殴りかかろうとしたが急に目の前が真っ暗になった

そして次に目を開けたときには俺の体は赤ん坊で新しい母が俺を優しく抱き締めていてくれた

始まりの人生（とき）（後書き）

どうでしかた？
大幅に話を直しました
感想、意見待ってます＾＾

叶えられた世界（夢）（前書き）

第二話です？
まぁ、でも文才はあがってないので広い心で見てください？
あと自分の作品は一話一話が限りなく少ないです？

叶えられた世界（夢）

俺の名前は月夜龍（つきやりゅう）
転生した世界で母と父が悩みに悩んで付けてくれた名前だ
俺もこの名前は気に入っている

俺はこちらの世界に見事転生し、今は俺が生まれて６年たった

「龍く～ん、冴子ちゃん来てるわよぉ」

「うん、分かった今行く！！！！！！」

俺は主人公達より一つ歳上で産まれて今は隣の家の毒島冴子さんと仲良くしている
冴子さんは家で剣道の道場を開いていて冴子さんの友達と言うことで一緒に稽古を受けている
俺がチート能力で全てにおいて万能と言っても長年の経験には勝てず冴子さんには一回も勝てたことがない
ま、取り合えずこんな話は置いといて玄関で待っている冴子さんの所に行かなければ

「冴子ちゃん、どうしたのこんな朝早くから？」

頭の中では冴子さんだが、実際に声に出して呼ぶ時は冴子ちゃんだ
別に冴子さんでも良いのだが六才の子が同級生をさんずけで呼ぶのはやはり違和感がある
だから、今は冴子ちゃんなのだ

「あのねぇ、リューくん」

「うん？どうしたの？」

あっ、ちなみにリューくんとは俺のことね♪

「あのねぇ、明日から学校じゃない？」

「そうだねぇ」

「だ、だから明日「あっ！そうだ明日からの学校、冴子ちゃん一緒に学校行こうよ！！」

「えっ！？あっ！？うん！！」

冴子は驚いていたが直ぐに笑顔でうなずいた

うわぁ～、いつ見ても冴子さんの笑顔は可愛いなぁ～

あっ！別に俺はロリコンじゃないか（ｒｙ

「じゃあ、また明日ねぇリューくん♪」

そう言って冴子は手を振りながら帰って行った

さぁ、冴子さんも帰ったことだしいろいろと説明しますか

え～とまずは、俺のことだなぁ、まず赤ちゃん時代は普通に赤ちゃんをしましたよ♪

ま、当たり前か～でもねぇ１つだけ困った事がありましてねそれは母が美人過ぎる所ですね、授乳の時なんかもう、興奮して何度気絶仕掛けたことか

そして3歳の時初めて冴子さんに幼稚園で会ったよ
そして3歳の時、喋るのが凄く恥ずかしかった
俺が死んだとき17歳だったから転生してからと合わせると20歳、20歳の大人が3歳言葉話すのは凄く抵抗がありますよ

まぁ、そんな感じで楽しくやってますよ♪あっ！そうだ妹の事を紹介してなかったな
俺には妹が居る名前は月夜恋夏（つきやれんか）、俺とは一つ違いの年子だ、そしてその妹が母譲りで凄く可愛いんだ更に俺になついてくれて「お兄ちゃん、お兄ちゃん」って言っては俺の後を着いて回る俺の自慢の妹だ

これくらいで紹介は終わりだ！でも、1つだけ気がかりな事がある
それは「斬龍」はどうやったら手に入るのかと言うことだ

「ハァ～、日本刀だしなぁ現実に持てるわけないしなぁ、神様に嘘つかれたのかなぁ」

そうやって、俺は日々悩んでいる
若い内から悩んでハゲないかなぁ？

叶えられた世界（夢）（後書き）

……むずかしい……

すこし変えました＞＜

進む我が自由（どくそう）（前書き）

またまたの投稿です？
でもまだまだ文才はありません？
それに一話ごとに短いし……
なんだかすいません？

進む我が自由（どくそう）

あれから数年が過ぎ俺と冴子は中学に入学した

それと、冴子さんの事を冴子さんと呼んだら他人行儀だから呼び捨てで良いと言われたので今では冴子と呼んでいる

「ハァ～、やっと入学式終わった～」

俺は入学式が終わり体育館から教室に帰って来て大きく背伸びをした

「だらしないぞ龍」

「良いじゃんかよぉ、冴子、入学式で気を使ったんだよ」

「あんまり淫らな姿をさらさないでくれ」

「ハイハイ、分かったよぉ」

「では、私は剣道部を見に行くが龍も一緒に行くか？」

「ああ、行くよ」

そう言って俺と冴子は机の横に吊るしてある鞄を持ち教室を出て剣道場に向かった

「なぁ、冴子は剣道部に入るのが決定なのか？」

俺達は武道場に向かって歩きながら話していた

「え？私は剣道部入るのは決めているぞ？」

「そうか、じゃあ俺も剣道部入るの決定だな」

「龍、別に私に合わして剣道部に入らなくても良いんだぞ」

「別に冴子に合わせてるわけじゃねぇよ、ただ今まで続けて少しは強くなったんだからこんな所で止めちゃ冴子の親父さんに怒られるからよ」

まぁ、今では冴子に勝てるくらい剣道も強くなって剣道部の一つ上の先輩ぐらいなら互角に渡り合える力を持っていると思うけどな

「そうか、ありがとう」

「どういたしまして♪」

そんな話をしながら俺達は道場を目指して歩いていった

「ハァ～、眠てぇ」

今は中学からの帰り、ちなみに外は真っ暗だった
なぜこんなに見学だけで遅くなったかと言うと冴子が剣道部の活動を見るだけじゃ足らず防具等を借りてやりだしたからだ
ま、俺は隅っこの方で冴子を待ちながら寝てましたけどね！！

「全く、恥はないのか龍？」

そんなことを冴子は俺に聞いてきた

「んな事言ったって出るもんは出るんだよ」

そう言って俺はまた大きなあくびをした

「少しは我慢をしたらどうだ？」

「なんだよ、知ってるんだぞ、今日の入学式の時冴子がうたた寝してたの」

俺は勝ち顔で冴子に言ってやった

冴子の驚く顔が目に浮かぶぜ

「な、何を言っている／／そんなわけないだろ／／」

冴子は顔を真っ赤にしながら一生懸命否定した

想像してた通りだ

「へ～、でもその時のよだれの後がまだ残ってるぞ？」

「う、ウソ！？／／」

「ウソだよ♪」

「だ、騙したな！！！！龍！！」

そう言って冴子は竹刀袋から木刀を取りだし俺を叩いてきた

「う、うわぁ！やめろ冴子、木刀で叩くな！！」

「うるさい／／」

でも俺は叩かれながら冴子の顔を見て
あぁ～、冴子っていつもは清楚なイメージだけど照れたりしたりしたら凄く可愛いなぁ～と思っていた
でも、そんなことを長くは考えられない、いくらふざけていても相手は木刀、痛くない訳がない！

「ちょ、冴子やめてくれ痛いって！！ちょっ！」

それから5分後やっと冴子は止めてくれた
もう少し早く止めてくれても良かったんじゃないかと俺は思った
そして俺達は二人とも落ち着き普通の会話をしていた

「なあ、冴子？どうだった？」

「何がだ？」

「いや、剣道部の先輩の強さ？」

「う～ん、そうだなぁ、普通かな？」

「普通かぁ、じゃあ冴子の方が強いのか？」

「それは……」

「なんだよ、黙りこんで」

「いや、一応目上の人だからな」

「それって冴子の方が強いってことか」

「多分」

「おっ、そうですか♪それじゃあ冴子さんはもう、勝つ気満々ですか？」

「それは龍の方だろ！！」

「お、一本取られたねぇ！ハッハッ」

そうやって、楽しく冴子と二人で帰った

オマケ

この後、家について可愛い、可愛い妹の恋夏に冴子に叩かれた所の手当てをしてもらいその後二人で仲良くリビングのソファーでテレビを見た♪（まだ恋夏は俺になついてくれている）

オマケ2

まったくそれにしても「斬龍」は本当に手に入るのかぁ～！！！！！

そう、心の中で叫んでいる今日この頃でした

進む我が自由（どくそう）（後書き）

むずかぁしぃ×１０
すこし変えました＞＜

暗闇と他人の関係（きょうふ）（前書き）

４話目になりまはすが全然
文才はないし……
１話は短いし……
と
全然、良いところがありませんが
応援よろしくｍ（__）ｍします

暗闇と他人の関係（きょうふ）

あれから俺達は中学に入学してからあっという間に3年が過ぎもう少しで卒業になる

そして高校は藤美学園に冴子と一緒に決め、受験し見事2人とも受かった

まぁそこに受からなきゃ物語楽しめないし、俺は神様からの能力で勉強なんてしなくても全てのテスト１００点だから絶対受かるんだよ

「あのさぁ、冴子？」

俺は教室で冴子の机の横まで行き床に座り冴子に話しかけた

「何だ、龍」

冴子は宿題を熱心にしていて俺の話を聞いているようには思えなかった

「なんだよ、素っ気ないなぁ嫌われるぞ」

「大丈夫だ、こんな態度をとるのは龍にだけだからな」

そんなことを言いながら冴子はまだ宿題をしていてこちらを一度も見てくれない

くそ～！可愛くないな、こうなったら少しからかうか！？

「なぁ～、冴子～？」

「何だ？」

「好きだ！冴子！」

「あぁ、そうか」

あ、アレ？反応が薄いぞ？もしかしてもうこの手は通じないのか？
（もうこの手は１４回目だ）

「……」

「……」

「って！！えぇ～！！！！！！な、何言を言っているんだ、こんな人前で！！！！」

ハッハッ、時間差反応とは冴子もテクって来たな♪
ま、あまりにも声がでかいからクラス中のみんなこっち見てるけどな！
冴子は恥ずかしくないのかな？

「ハッハッ、やっぱり面白いなぁ冴子は♪」

「な、何がだ！！」

「嘘だよ、冗談♪」

「冗談？」

「そ、冗談♪」

「冗談で……」

「ん？」

「冗談でそんなことを言うな～！！！！！！！！！！」

あ、あれ冴子？な、何怒ってんだ？木刀なんて握って？

「えっ！？ま、待て！！待ってくれ！！そんなもん振り回したら危なギャー！！！！！！」

そして俺の意識はそこで途絶えた

「う、うん？」

あぁ、頭がズキズキするなぁ何でだぁ？
てかここ保健室じゃん？
何で俺こんな所で寝てんだ？
え～と、教室で冴子に話しかけて、からかって、そして～～？そんだぁ冴子に竹刀で殴られたんだ！！！
そうかだから頭がズキズキするのかぁ！！

「あっ、月夜くん起きた？」

俺が目を覚ますと保健室の先生が話し掛けてきた

「大丈夫？月夜くん？」

「はい、頭はズキズキしますけど大丈夫だと思います」

俺は頭に手を当てながら言った

「まぁ、頭がズキズキするのはどう使用もないから我慢して教室に戻って帰りなさい」

「え？でもまだ五限が」

と言いながら窓の外を見るともう、外は真っ暗だった

「何言ってんの、もう7時よ」

「嘘！？ヤバい冴子との約束が！！」

俺はこの日一緒に最後の部活に行こうと冴子と約束していた

「あぁ、また冴子に殴られるぅ」

そう言って俺達は肩を落とした

「それは大丈夫よ、月夜くんのこと心配してたし、もう、殴らないって言ってたから」

「そうですか、それなら安全ですね、じゃあ俺帰りますね心配かけました」

俺は先生に礼を言い、教室に戻った

あんなこと言ってもたぶん冴子怒ってるだろうなぁ、明日謝ろう

そんなことを考えながら俺は教室に向かって歩いていると

ん？あれ？教室電気ついてないか？もしかして冴子か？

俺はそんな期待して教室に向かった

「ドジだな、月夜はハッハッ」

「ハハ……」

俺は教室に電気がついていたので冴子ではないかと期待しながら教室に向かったが見事に期待は、ハズレて教室に居たのは担任の長野だった、そして今にいたるのだ

くそぉ、何で担任なんだよ！！面倒くさいな！帰るぞ！

「先生！！俺帰りますね！！」

「何だぁ、連れないなあ」

「もう、遅いですから！！」

そう言いながら俺は机の横に吊るしてある鞄を持ち、教室の後ろに立て掛けてある木刀を持って教室を出た（木刀を持っているのは今日冴子と一緒に部活に行く約束をしていたからだ）

そして俺は学校を出て暗い道を一人で歩いていた
はぁ、一人で帰るのなんて何年ぶりだぁ？こっちでは冴子といつも一緒だったからな一人で帰るなんてなかったな
そんなことを考えていたらふと声が聞こえてきた

『その角を曲がれ、そして男の声がする方に急いで向かえ』

何だ！？この声、頭の中に直接話し掛けて来るような嫌な声、そんな声が突然聞こえて来た

『急げ』

「ああ、分かったよ行くよ！！！！」

そう言って俺は角を曲がり男の声がする方に向かった、そこは暗い路地裏で、かすかに街灯の光が届いている所だった
そしてそこから男の声が聞こえて来た

「ハァハァハァハァ、可愛いねキミ、ハァハァ」

そこにはスーツを着た中年ぐらいの男が女の子を迫っていた

「く、来るな！」

女の子はそう言いながら後ずさるが直ぐに壁に当たり後ろに進めなくなったそれを見た男は笑みを浮かべながら迫っていった

「お、お願い誰か助けて！！助けて！！」

女の子がそう叫んだとき一瞬だけ車の明かりに照らされて見えなかった女の子の顔がハッキリと見えた

えっ！？アレって、冴子？ってヤバいチンタラ見てる場合じゃない！！助けなきゃヤバい！！！

俺はそう思い、右手の竹刀袋から木刀を取り出して冴子を助けようと男に殴りかかった

「冴子を放せ！！！！」

「な、何だお前！！ってうわぁ！！！！」

そして俺は木刀で男の肩甲骨と腕の骨を折ってやり男はその痛みで地面に丸くなって気絶していた

「大丈夫か冴子？」

俺は冴子に話し掛けた

「り、龍！！！！」

冴子は泣きながら俺に抱き着いて来た

「もう、大丈夫だから冴子」

俺は優しく抱き着いている冴子の背中に手を回し抱き締めた

「ありがとう、龍」

しかしその時、俺は冴子が背中に木刀を持っていたのを見過ごさなかった

そいて、それから数分して警察が来た、俺が木刀で男を殴っていたのを目撃されていたのだ警察は事情を俺達2人に聞き、救急車を呼び男を乗せていった

一応、後で何かあるかも知れないからと家の電話番号は聞かれた

その後は警察の人が車で家まで送ってくれた

暗闇と他人の関係（きょうふ）（後書き）

どうでしたかぁ？
文才ないから下手でしたよね（～3～；）
すこし変えました＞＜

今までと明日（みらい）（前書き）

やっと5話まで行けました…
でも、自分の文才は上がりません（ε-；）
どうしよう？

今までと明日（みらい）

冴子が男に襲われる事件から3年が過ぎ、アレからいろいろあった

1つは冴子の父がアノ事件を知り俺に冴子を守って欲しいとお願いされて登下校は必ず2人で行っている

そして2つ目は冴子の父が海外に行くと言うことで俺ん家に冴子が住んでいること、冴子は1人でもやって行けると言ったのだがまたアノ事件の事で一緒に住むことが決まった

そして3つ目は、やっと神様が「斬龍」をくれたことだ、ある日いきなり目の前が真っ白になってきずいたらアノ時と、神様と初めてあった時の空間にいた、そしてそこに神が現れ、やっと斬龍が出来たからと俺に手渡した

そして「斬龍は絶対に折れない」と神は言い、目の前が真っ暗になり俺は目を覚ました

目を覚ました時、俺は斬龍をガッチリと右手でつかんでいた

そして、起きてから数分たってから神への恨みを思い出した

「くそぉ～！忘れてた、覚えてたら、試し切りで切ってやってたのに！」

俺は神への恨みをもう一度噛みしめた

そして最後に4つ目は妹の恋夏が俺と同じ藤美学園に入学したのだ、俺的には同じ高校に恋夏が居ることですぐに助けられるから良いことだ、でも本人曰く（いわ）ただ俺と同じ高校が良かったから、ら

しい

まったく、恋夏のヤツ！！
可愛いやつめ！！抱き締めてやりたいよ！！
と俺は思った

だが１つだけ言っておく！俺はロリコンじゃな（ｒｙ

まぁ、この２年間と少しの間に起きたことはこのぐらいだ

そして明日、《奴ら》が高校にくるとアノ事件の時に聞こえた声がまた聞こえてき、教えてくれた
だから、その為に俺は明日に備えて準備をして寝た……

「って何で！！恋夏が俺の布団の中にいるんだぁ～！！！！」

「良いじゃん♪お兄ちゃん♪一緒に寝ようよ♪」

今までと明日（みらい）（後書き）

読んでくれてありがとうございます（、３、）
まだまだ続くので首を長くして待っていて下さい！
すこし変えました＞＜

出口の後は入口（おわり）（前書き）

今回は少し長いのを書きました

でも文才が……

出口の後は入口（おわり）

今日、俺の知っているこの世界は終わりを告げる

キーンコーンカーンコーンキーンコーンカーンコーン
今、授業の始まりを知らすチャイムがなった
だが、俺は教室には行かずに屋上にいた

「よっ、孝」

俺は、俺と同じで屋上にいた小室孝に声をかけた
孝とは恋夏と同級生と言うことでたまに会話をする仲だった

「あっ月夜先輩、先輩もサボりですか？」

「お前と一緒にするな、孝と違って俺は屋上で皆の安全を守りながら昼寝をしているんだ！！」

俺は胸をはって言った

「結局サボりじゃないですか？大学入試すべりますよ？」

「だからお前と一緒にするな！！俺は頭良いの！学年で一位の成績をなめるなよ！！」

またもや俺は胸をはって言った

「あぁ、そうだった月夜先輩は頭良いんだった…」

孝はあからさまに肩を落として落ち込んでいた

「まったく、そう落ち込むな孝、まだお前には一年ある気長に頑張れや」

そう言って俺は桜を見た

「先輩に言われたら、嫌味のようなぁ～」

俺の話を聞いた孝はまたもや肩を落とした

そんなことをしていると後ろの方から声が聞こえてきた

「でも少しくらい頭の悪い方が可愛いのだぞ小室くん」

「えっ！？毒島先輩！？」

そこでいきなり声が聞こえたので孝は驚いた様子で後ろを振り向いた

しかし俺は冴子が屋上に静かに入ってきたのを孝と話し間にきずいたので驚きはしなかった

「おい、冴子それは可哀想だって、馬鹿だとか言ってやるなよ」

「言われてないですよ・・・・」

「まぁ、それより龍、剣術の練習付き合え」

冴子は突然、そんなことを言ってきた

「冴子はいつもいきなりだよなぁ、こっちにはこっちの用事があるのによ」

「何だ？用事とは？」

「昼寝」

俺はキッパリとそう答えた

「そうか、それなら仕方ないな用事が有るんだ。まぁ、龍が一緒に稽古してくれないのなら私は違う男性と2人っきりで練習するとしよう」

そう言って冴子は屋上から降りようとしていた

「ちょっと待った！！稽古付き合うよ、だから違う男と稽古するな！！」

「じゃあ、行くぞ龍」

そう言って冴子は屋上を出た
俺もそれを見て慌てて屋上を後にした
そしてその光景を見た孝が呆れていたとかいなかったとか

それから俺達は道場で2人っきりの稽古をした
まぁ、2人っきりと言ってもいつも通りの練習だった
「冴子、今日はここまでにしないか？」

「ああ、そうだな私も疲れたシャワーを浴びて教室に戻ろう」
冴子はそう言うとバックの中からタオルを2枚出し一枚俺に手渡した
「どうせ今日も持って来ていないのだろ？」
「いきなりだったから持って来てないんだよ」
俺は毎回部活終わりにシャワーを浴びるのだがいつもタオルを忘れて冴子に借りるのだった
だしかし今日は《奴ら》が来る日だからタオルなんて要らないと思ったから持ってきていないのだ
あっ、別に言い訳じゃないからな！これはれっ（ｒｙ
「何をしている龍？早く行くぞ」
「ちょっと待ってくれ！」
そして俺達は部活専門のシャワーを使いに言った
そう言ってもシャワールームは体育館の一階だ、道場は体育館の二階にあるから、直ぐに行けるのだ
「なぁ冴子？今日は背中を流してやる何て言わないよな？」
「龍、分かりきっていることを聞くな」
「やめてくれよ冴子、アレは俺の理性が持たない！」

「それなら襲ってくれても良いぞ？」

冴子はニコニコ笑いながら言った

「くそぉ！！」

そんな会話をしているとシャワールームについた

「じゃあ、浴るとするか汗だくで気持ち悪い」

冴子はそう言うとシャワールームに入っていった

でも俺は迷っていたどうするべきか

何故そんなに俺が悩んでいるかと言うと理由は２つある

１つ目はシャワールームにシャワーが２つしか無いと言うこと

前までは４つあったのだが２つとも今は壊れている

そしてシャワールームに男女別ではないのだ１つ１つのシャワーが個室見たいなところについているのだがその個室の壁が胴体しか隠せないぐらいの壁なので横に誰がいるのかも全て分かるのだそしてそれを冴子と横どうしで入らなければいけないのだ

そして２つ目が冴子が背中を流してくれると言うことで俺のところに入って来る事だ

俺はそんなことを考えているとシャワールームから冴子が出てきて無理やり連れてて行った

「早く浴びないか龍！」

「分かったよ、浴びるよ」

「じゃあ、早く入ってこないか」
そう言って冴子はシャワーを浴びに行った
そして俺も冴子の横の個室に入りシャワーを浴びた
すると
「なぁ、龍？私の事嫌いか？」
「えっ！？」
俺はいきなり過ぎて冴子の言っている事が分からなかった
「だから、龍は私の事嫌いなのか？」
「そんなわけないだろ嫌いだなんて」
「だったらなぜシャワー浴びる時嫌がる？家でだって私が隣に座ったら逃げるではないか！」
「何だよそんな事気にしてたのかよ、大丈夫だよ嫌いなヤツと一緒に登下校したり土日も一緒に遊びに行ったり出来るほど俺はできてない」
「本当か龍？嫌いじゃないんだな！」
「ああ」
「分かった、ありがとう」

そう言って冴子はシャワーを止めタオルで体をふき制服に着替えてシャワールームから出ていった
その後、俺も体をふき制服に着替えてシャワールームを出た

シャワーを浴びた俺達は道場に戻り冴子は木刀を取り俺は斬龍を入れた竹刀袋を取り教室に向かおうとするとアノ放送が流れてきた

「全校生徒・職員に連絡します！現在、校内で暴力事件が発生中です、生徒は職員の指示に従って直ちに避難してください。繰り返します直ちに「ゴトォ」……うわぁ！やめろ来るな！助けてくれ！ギャァァァ！！！！！！」

この放送後、俺は本当にこの世界は終わったのだと実感した

「りゅ、龍？今のは何なのだ？」

冴子は俺の顔を見てそう言った

「わからない、だが避難訓練ではなさそうだ」

「じゃあどうする」

「冴子、俺はとりあえず公舎に行ってみる状況を把握したい、それに恋夏のことも心配だ」

「分かった龍、じゃあ私もついていく」

「いや、冴子には校医の鞠川先生を連れてきてほしい、もし本当に暴力事件だとすると怪我をしている人がいるかもしれない」

「そうか、なら急ごう」

「それじゃあ、待ち合わせ場所は職員室だ」

「承知した」

そして俺は恋夏のいるクラスに向かった

「ハァハァ、何なんだよこの状況は！？やっぱり漫画と現実では感じ方が全然違う！！」

俺は恋夏のクラスに向かう途中に多くの《奴ら》を見た
友達だった奴や、後輩やいろいろな《奴ら》を見た
まだ《奴ら》になってない人たちの悲鳴も何度も聞いた

しかし俺はそんな事にかまっている暇などない今は恋夏を助ける事だけに集中しなければいけないのだ

「キャァァァ！！！！」

すると恋夏のいるクラスから恋夏のと思われる叫び声が聞こえて来た
俺は急いで恋夏のいるクラスに向かいドアを開けた

「キャァァァ、来ないで来ないで！！」

そこには誰も居ない教室の隅で恋夏が《奴ら》に襲われかけていた

「やめろぉ！！」

俺は竹刀袋から斬龍を取り《奴ら》に斬りかかった
《奴ら》は3体いた、それを俺は斬龍で一気に首を切り落とした
そして頭の無くなった《奴ら》は無惨に倒れた
「恋夏大丈夫か！？」
俺は隅で怯えている恋夏に近づいた
「お、お兄ちゃん？」
恋夏は顔を上げ今にも泣きそうな顔でこちらを見た
「大丈夫か恋夏？お兄ちゃんが助けに来たからもう大丈夫だ、ほら立てるか？」
「うん、大丈夫立てれるよ」
恋夏はそう言って立ち、俺に抱き着いて来た
「お兄ちゃん怖かった怖かったよぉぉ！私お兄ちゃんが迎えに来てくれるって信じて待ってたんだよ！！ぐすぅ、うわぁぁぁん！」
「恋夏悪かった、お兄ちゃんがもっと早く助けに来てやってたら怖い思いをしないですんだのにな」
俺はそう言って恋夏を抱き締めた
恋夏はその間ずっと泣いていた

それから数分後

「お兄ちゃんありがとう、もう大丈夫だから」

そう言って恋夏は俺から離れた

「そうかじゃあ、逃げるぞ恋夏」

「逃げるってどこに？」

「取り合えず職員室に行く、そこで冴子と約束してる」

「冴子？毒島さんね、やっぱり私を助ける前に毒島さんに会ってたんだ」

恋夏は冴子の事を嫌っている理由は知らないが冴子が俺ん家に住むようになってからだ

「違う冴子とは一緒に剣道の練習をしていたからであって一番に恋夏を助けに来たんだよ！」

「本当かなぁ？」

「本当だ！！」

「じゃあ今回だけは見逃してあげる2回目はないからね」

「はい」

俺は絶対に女性の尻に退かれるとつくづく思う

「分かったならよろしい、それじゃあ、お兄ちゃん急ごう」

そして俺達は急いで職員室に向かった

俺達が走ってやっと職員室近くについた時だった

「キャァァァ！！」

また悲鳴がした、でも今回は漫画にあった高城沙耶の悲鳴だと気づいた

「恋夏行くぞ！」

そう言って俺達は沙耶の居る方向に向かった

「寄らないで、寄らないで」

沙耶の居る所についた時、俺は最初に沙耶が《奴ら》の頭に電動デリルを突き刺しているところを見た

そして俺がその場についてから直ぐに孝達や、冴子達が来た

そして冴子と目があった瞬間

「私はあの子を見る龍は近くの《奴ら》を倒してくれ」

「って！！俺かよ！！！！！」

突然の言葉に俺は思わず叫んでしまった

「さっさとやれ、龍！！」

冴子は手でしっしっとしてそう言った

「くそぉ、人をこきつかって！！覚えとけよ！！」

「さっさと行け」

「たっく、シャねぇなぁ！！！！！」

俺はそう言って斬龍を片手に《奴ら》に向かていったその後直ぐに

「俺も手伝います！！」

と孝が冴子に言い《奴ら》と俺が戦っている方に向かおうとしたとき

「止めときたまえ、君では足手まといにるだけだ」

冴子は手で孝の行き先をふさいでそう言った

「そんな、やって見なきゃ分からないじゃないですか！！」

「では後１０秒待てそしたら行って良い」

そんな会話を俺は《奴ら》を斬りながら聞いていた

くそぉ、冴子のヤツ！！あと１０秒で終わらせろって事かよ！！少し力入れなきゃなんねぇじゃねえかよ！！！！

俺はその後９秒で《奴ら》６体を倒した

たく俺にこの能力があったから倒せたけど無かったら絶対死んでるよ

「全く人使い荒いなぁ冴子は」

《奴ら》を倒した俺は冴子にそう言った

「血生臭いからこっちに寄るな」

またもや冴子は近づいてきた俺を手でしっしっと追い払った

「くそぉぉ！！！！！！」

俺は思いっきりそう叫んだ

出口の後は入口（おわり）（後書き）

やっと原作に入れました……
でもでも文才がないからヘタヘタです……
すこし変えました＞＜

学園の後は街（あくむ）（前書き）

またまたの投稿（O▽O）

でもでも文才ないからね……

学園の後は街（あくむ）

俺は沙耶を助けるために近くの奴らを倒したのに冴子に追い払われて隅っこで恋夏に慰めてもらっていた

「よしよし、泣かないのお兄ちゃん」

妹に頭を撫でられながら慰められている兄貴は最低だと俺は思った

「龍！いじけてないでこちらに来い男だろ？」

と冴子が俺を呼んだ

「お前のせいだよ！！」

俺はそう言いながらも冴子達の方に行った

「で何だ、冴子？」

「取り合えず、自己紹介をしといた方が良いと思ってな」

「あんまり騒いだらまた奴らが来るぞ？」

「その時は頼んだぞ」

冴子はそう言って俺の肩を軽く叩いた

「また俺か！？」

「みんな鞠川校医は知っているな？私は毒島冴子、３年Ａ組だ」

「無視かよ！！」

冴子は俺の問いを無視して喋りだした

「小室孝２年Ｂ組」

「去年全国大会で優勝された毒島先輩ですよね？私は槍術部２年宮本麗です」

「えっとぼ、僕は平野コータＢ組です」

「私は月夜恋夏、２年Ａ組です」

「よろしく」

冴子は笑顔で言った

その後に沙耶が文句を言って来るのだが俺が奴らを倒している時に鞠川校医と一緒になだめたらしい

「あのぉそこの人は？」

平野が俺の事を冴子に聞いた

「あ、彼か？龍、皆気になっているぞ」

「ハイハイ分かったよ、俺は冴子と同じＡ組だ名前は月夜龍、そこの恋夏の兄貴だ」

俺は面倒くさそうに言った

「では取り合えず職員室に入ろう話しはその後だ」

冴子はそう言って職員室に向かって歩き出した

それから俺達は職員室の中に奴らが居ないのを確認した後入り、入り口や窓をふさいで奴らが入ってこれないようにした

「おい龍、その真剣はどうした？」

冴子が俺の斬龍を見ながら言った

「あぁ、これかこれは俺の大切なお守りだ」

「そうか、これ以上は聞かないことにしとくよ」

冴子はそういってみんなのところに行った

そのあと俺は顔を洗っている沙耶の所に行って声をかけた

「あの高城くん？」

「ハイ？」

沙耶は顔を洗うのを止め首にかけていたタオルで顔をふきこちらに向いた

「えっと俺の事は知ってるよな？」

「はい」

「それで、俺のことは気軽に月夜とでも呼んでくれ、年上だからっと言って遠慮はするな」

俺はこの事を孝や麗、コータに言って回っていた
正直歳上とか歳下とか堅苦しいことが生き残るためには要らないと思ったからだ

「分かったわ、それじゃあまず私の事を高城くん何て他人行儀な呼び方じゃなく沙耶って呼んでよね」

「分かった、沙耶」

そして沙耶との話を済ました俺は皆が居る所に行って話した

「なぁ、皆聞いてくれ！！こんな状況にも関わらずパトカー１つ、音が聞こえないと言うことは外もこれと同じ状況だと思う！だから、鞠川先生の運転で学校を出て親の安全を確保したいと思うどうだ？」

まずこのまま学校に居ても何も解決しないことを皆知っている、そして冴子が鞠川先生と話しをしていてくれて車は問題ない
だから、取り合えず学校から抜け出す事を第一に考えた

「龍、私は意義ない」

「私もお兄ちゃんに賛成」

「僕たちも月夜先輩の案で良いです」

「それじゃあまず車の確保だ、案としては部活の遠征で使うマイクロバスなんてどうだ？」

「まだありますよバス」

平野が窓から駐車場を見ながら答えた

「それで良いがバスの鍵はどうするのだ」

「それならさっき見つけておいたココにある」

そう言って俺はズボンのポケットからバスの鍵を出して冴子に見せた

「では、行こうしかし皆好き勝手に動いては生き残れまい、チームだチームを組むのだ生き残りも拾って」

「でも、どこから外え？」

と麗が孝に聞いていた

「駐車場は正面玄関からが一番近いそこから行くんだろう？でしょ月夜先輩？」

「全くこう言う時だけ頭がきれるよな、孝、お前って」

「月夜先輩もそう思ってたでしょ？」

「ま、そうだなあと月夜で良いって言っただろ」

「今のままでいいですよ」

「分かった、それじゃあ行くか！！」

そう言って俺達は職員室を出て、正面玄関に向かった

そして玄関につながる階段についた

「最後に確認しておくぞ無理に戦う必要はない避けられるときは避けろ！転がすだけでも良い！！」

「連中音にだけは敏感よ！それから普通のドアなら破るくらいの腕力があるから掴まれたら喰われるわ！気をつけて！」

と冴子と沙耶の警告を聞いたあとまた悲鳴が聞こえてきた

「キャァァァ！！」

「くそ、また悲鳴かよ！！次はどこだ！？」

「階段のところよ！」

沙耶が指を指して教えてくれた、俺はそれを聞いて階段に向かった

「卓造…」

「くそぉ……下がってろ！」

そこには奴らに囲まれて身動き取れない状態の男女のグループがいた

「冴子、あそこだ！！行くぞ！！」

「龍は右を頼む私は左をやる！！」

「ああ！！」

俺は階段を飛び降り奴らの首を次々と落とした

その間に冴子も奴らを倒していた

「あ、ありが……」

「あまり大きな声を出すな、噛まれたものはいるか？」

「えっいませんいません！」

男女のグループの一人が手を降って答えた

「大丈夫みたい本当に」

「俺らは今から学校を逃げ出す一緒に来るか？」

「え、ええ！」

こうして仲間が増え、俺達は正面玄関に向かった

しかし、俺はあまり仲間をむやみに増やすのは嫌だった・・・

「やたらといやがる」

「見えてないから隠れる事なんて無いのに」

「じゃあ高城が証明してくれよ」

俺達は正面玄関についた
しかし奴らの多さに立ち止まっていた

「たとえ高城くんの説が正しいとしてもこの人数では静かに進むことなどできん、校舎の中を進み続けても……襲われたとき身動きがとれない」

「玄関を突き抜けるしかないのね」

「誰かが……確かめるしかあるまい」

俺達はその言葉を聞いたあと静かになった、誰も確かめたくないのだそう言えばこの場面って漫画では孝が行くけどぉ、まぁ俺が行っても大丈夫だろ

「なぁ、俺が行くよ」

俺は自分から言った

「龍が行くより私が……」

「いや、冴子はいざとなった時に皆を守ってくれ」

「……分かった」

「ちょっと待ってよ！なんでお兄ちゃんが……なんで」

恋夏が俺の腕を掴んで言ってきた

「別に理由なんて無いよ、強いて言えば冴子や恋夏にカッコいい所を見せたいと言う男のわがままかな」

俺は恋夏に笑顔で答えた

「バカ……」

恋夏はそう言って俺の腕から離れた

「なあに、大丈夫だよ♪」

そう言って俺は奴らの方に静かに向かった

俺の横を通り過ぎる奴らや目の前を通り過ぎる奴らがいるが完全に俺が見えてない事が分かると俺は床に落ちていた片方だけの靴を持ち遠くになげた

投げた靴は落ちた所で音がして奴らがそちらの方に向かっていった

俺はその間に正面玄関を開け皆を出していた

その時「ガキィィン」という大きな音を誰かが出したその音を聞いて俺は

「走れ！！」

と大声で叫んだ

「何で声出したのよ、黙っていればやり過ごせた「無理だよ沙耶、焦らずに考えろあの音がどれだけ響いたか」

俺は沙耶の言うことを全て聞かずに返した

「それでも……」

「取り合えず今は走れバスに向かって全力で走れ！」

俺は沙耶にそう言って奴らを倒しにかかった

「おい、そこのヤツ！！闘うな走れ生き残りたいだろ！！」

「あ、はい！」

俺は首にタオルをかけて戦っているヤツにそういった

「龍！！速く来い！！皆乗り込んだ！！後は出すだけだ！！」

「分かった今行く！！」

奴らを倒すのはやめ、俺はバスに乗り込んだ

「待ってくれぇっ！！」

俺が乗り込んでドアを閉めようとした時にそう聞こえてきた

「アレは紫藤か」

「紫藤？」

「もう出せるわよ！！」

「少し待ってください」

「でも前にも奴らが」

「あと少しだけ」

「先輩、あんなヤツ助ける必要なんてないわ！！」

「どうした麗！？」

俺は麗が紫藤を嫌がる理由も全て分かっていたが俺は紫藤達をバスに乗せる事にしていた

「あんなヤツ助けなくていいです！！死んじゃえばいいのよ！！」

俺たちがそんな会話をしていると紫藤はバスに到着し乗り込んで来た

「鞠川先生！！」

「行きます！！」

そう言って鞠川先生はバスを発進させた

「……ハァ、助かりましたリーダーは毒島さんですか？」

乗り込んで来た紫藤が冴子にそう聞いた

「そんな者はいない逃げる為に協力しあっただけだ」
冴子がそう答えると紫藤が不気味な笑みを浮かべこう答えた
「それはいけませんね……生き残るためには絶対にリーダーが必要です、目的をはっきりさせ秩序を守らせるリーダーが」
紫藤はそう言って黙って席に着いた
その間俺はずっといじけていた
理由は紫藤がリーダーを冴子しか言わなかったからだ
くそぉ、紫藤！！覚えとけよ！！このバスに乗った事を後悔させてやるからな！！
そんなことを考えていると前の席に座っていた沙耶が話しかけてきた
「何いじけてるのよ先輩、元気出しなさいよ」
「だって俺だってリーダーの資格あるのに紫藤が冴子しか言わなかったから」
「はぁぁ、そんなこと言ったってアッチは成績優秀おまけに剣道部主将、去年全国大会で優勝した実力の持ち主よ、頭が良いだけの先輩とは違いすぎるわよ」
沙耶はあきれたようにそう言った
するとその話を聞いていた冴子が沙耶に言った
「剣道も龍の方が強いぞ」
「えっ！ウソ！？それじゃあ何で毒島先輩ばかり剣道強いって言わ

れるの？」

「なぜ龍が、いろいろ言われないかというと本人が嫌がるからだ、勉強は普通にやっているが、スポーツは力を出していない、だが剣道だけは本気を出すから一年の時に全国大会で優勝している」

「それじゃあ何で主将にならなかったの？」

「龍のアノ性格だ、面倒くさいから代わりにやってくれって言われたのだよ」

「そんなに凄かったんだ先輩って」

「冴子、言うなよ」

「別に良いではないかもう、隠す必要もなかろう」

「それに先輩、それが本当だとすると先輩ってすごいのね」

「惚れたか？」

「惚れてないわよ！！バカ！！」

そう言って沙耶は前に向き直した

その後俺は紫藤達と一緒に乗って来た金髪君が喋り出すまで鞠川先生の話し相手をしていた

学園の後は街（あくむ）（後書き）

文才ってどうやったら上がるのかなぁ？
疑問だぁ……
すこし変えました＞＜

一時の安心感？（やすらぎ）（前書き）

やっと街に出たおはなしです♪

一時の安心感？（やすらぎ）

俺達は学校を脱出した

それから何分かバスで走ったぐらいの時だった

紫藤達の中にいた金髪君が俺達に文句を着けてきた

「だからよぉっ、このまま進んだって危険なだけだってば！！だいたいよぉ！！」

しかしそれを皆黙って聞いていた

だれも何も言わない事で金髪君はいろいろな事を言った

それに便乗してどこかに立て籠った方が良いと言うヤツまで現れた

それを聞きながら運転していた鞠川先生はバスを止め文句を言っているヤツに言った

「もういい加減にしてよ！こんなんじゃ運転なんか出来ない！！」

鞠川先生の言っている通りだった

これから町に向かうにしても、向かわないにしてもこんなのでは上手くいかない

そう俺達は思った

そして孝は文句を言っている金髪君を睨んだ

「んだよぉっ、何見てんだやろうってのか！」

金髪君は睨まれた孝にそう言った
するとそれに見かねて冴子が言った
「ならば君はどうしたいのだ？」
冴子がそう聞くと金髪君は一瞬返答に困っり言葉をつまらせた
しかし直ぐに孝を指差し孝の事が気に入らないと言った
孝もそれを聞き、言い返した
「なにがだよ？俺がいつお前に何か言ったかよ？」
「てめぇ」
金髪君もそう言い返した
するとその会話を聞いていた麗が歩いてき持っていた棒で金髪君の腹部を殴ろうとした
しかし俺がそれを手で受け止めた
「止めろ麗、暴力で解決するな、苛立つ気持ちも分かるが今は押さえて座っていてくれ頼む」
俺は麗にそう言うと手で受け止めていた棒を離した
「……分かりました」
麗はそう言って元の席に戻った
そして俺は金髪君の方を向き言った
「俺達の仲間に文句をつけるな、降りたいなら勝手に降りろそれが嫌なら黙って座ってろ、邪魔なんだよ」

俺は怒鳴らずに冷静に平然とそう言った
それを聞いた金髪君は俺の方をにらんだが直ぐに黙って席についた
すると突然紫藤が拍手をしてきた

＞パチパチパチパチ＜

「実に仲間思いなことだ、しかしこうした争いが起こるのは私の意見の証明にもなっています、だからリーダーが必要ですよ我々には」

「で、候補者は一人きりってワケ？」

それを聞いた沙耶が紫藤に言った

「私は教師ですよ高城さんそして皆さんは学生です、それだけでも資格の有無ははっきりしています」

そして紫藤はそれを言うと後ろに向き言った

「どうですかみなさん？私なら問題が起きないように手を打てますよ？」

それを聞いたやつらは全員紫藤に、拍手をした

「……と言う訳で多数決で私がリーダーと言うことになりました今後は……」

紫藤がそこまで話したところで麗が動いた

「先生開けて……開けてください私降ります！」

「え？でもあの」

「私こんなヤツと一緒居たくない！！」

麗はそう言って助手席のドアから飛び降りた
俺はそれを見ていた孝に言った

「孝！麗と一緒に行ってやれ！！あんな状態だ戻っては来ないだろ」

「でも、それじゃあ」

「今日の5時に東署で待ち合わせだ、今日が無理なら明日の同じ時間だ、だから気にするな女を追うのは男の役目だ、行って来い！！」

「分かりました行ってきます！」

「気を付けろよ」

「はい」

孝はそう言ってうなずくとバスから降り、麗の所に向かった
そしてその後、前からバスが来て事故を起こし炎上した
そしてその事故に巻き込まれた孝達の無事を確かめた後、俺は鞠川先生にバスの再出発をお願いした
そしてバスは再発進し俺は黙って席についた

俺達は孝と麗の待ち合わせの東署に鞠川先生運転のバスで向かって

いたが途中、街の中に入る橋で渋滞につかまりバスは止まっていた
そしてその間紫藤は、俺達以外の生徒に何かを吹き込んでいた

「ねぇ、お兄ちゃん大丈夫かな」

するとふと恋夏が俺の席に来て言った

「ん？何がだ恋夏？」

「だってあの先生の話を聞いてる人達の目、何だが怖いよ」

「大丈夫だって恋夏、危ないときはお兄ちゃんが守ってやるから、
だから今は休んでろいつまた歩くか分からないからな」

「うん、分かった」

恋夏はそう言って自分の席に戻った
しかしもう直ぐで誰かが痺れを切らして言うだろう

＜紫藤にはついて行かないと＞

だからまぁ、その時まではゆっくり休まなきゃな

「あのさぁ先輩？」

そうそうこう言う風に沙耶が後ろを向いて話しかけて来るまで……

「って早！！」

「えっ、なにがよ！？」

「あっいや、ごめんこっちの話し」

「いきなりだからビックリするじゃないの！！」

「悪い悪い、でどうした？」

「先輩はどう思います？」

「そうだなぁ、まずは沙耶お前の全てが知りたい！もちろんエロい意味で！！」

俺は親指を立てて沙耶に笑顔で答えた

「な、何言ってんのよ！！バカ！！」

「嘘じゃないよ俺は沙耶の全「いい加減にしろ、龍！！！！」

俺が沙耶と話をしているといきなり冴子が叩いて来た

「っ！何すんだよ冴子！もう少しで沙耶が俺におちそうだったのによ」

「おちないわよ！！」

沙耶はすぐさまツッコんできた

「そんな冗談はもう良い、話し合うぞ皆でこれからについて」

冴子は沙耶のツッコミを流して話した

それを聞いた俺は真剣な顔で沙耶に言った

「ああ、分かった、沙耶は横のコータを起こしてから前に来い」

「ええ分かったわ」

そう言って俺は席を立って運転席に行った

「ちょっと来てくれ恋夏」

俺は運転席で大事な話をするから恋夏も呼んだ
その後沙耶はコータを起こして運転席に来た
そして皆がそろったところで俺が言った

「なぁ、これから向かう所は孝との待ち合わせ場所の東署だけど、
それこまでに行く橋が今通行止め状態だどうする？」

「そうねぇ、私はまずこのバスから降りたいわね」

沙耶は紫藤の方を見て言った

「私もそれで構わない」

「私はお兄ちゃんが一緒だったらどこでも良いよ」

沙耶の意見に冴子と恋夏の２人はＯＫを出した
後はあの２人だけだ

「あのぉ、鞠川先生は俺達と一緒にバスから降りますか？」

そして俺は鞠川先生に聞いた

「えっ、私は皆と一緒だったら良いわ、それに紫藤先生のことあまり好きじゃないのよね」

「それは結構！あと、コータお前も一緒に来るだろ？」

俺は今まで黙って沙耶の横にいるコータの方を向いて言った

「えっ……と、僕もそれで良いです」

「良し、それじゃあ満場一致で決まりだな今からバスを降りるぞ」

俺はそう言って鞠川先生にバスのドアを開けてもらいバスから降りようとした時、紫藤が話し掛けた

「ん、貴方達どうしたんのですか？」

「ん？先生、今から俺達このバスから降りるわ、別に修学旅行じゃないんだから団体行動なんてしなくて良いだろ？」

俺は紫藤の方に振り向いて言った

「ほう、あなたたちがそう決めたのならどうぞご自由に月夜くん、なにしろ日本は自由の国ですからね！！」

「それじゃ俺達は「しかし、あなたは困りますね鞠川先生！現状で医師を失うのはマイナスが大きすぎます」

「！！」

鞠川先生が紫藤に呼び止められて驚いていた

「さぁ、鞠川先生「ちょっと待てよ、紫藤先生」

俺は鞠川先生の前に立ち言った

その事を不思議に思った紫藤が聞いてきた

「ん、何ですか？月夜くん？」

「俺は別にお前がリーダーになろうと、そこの連中等に何を吹き込もうがどうでも良い、だけどな俺達の仲間の鞠川先生をここに一人置いてけって言うなら俺はお前を殺してでも鞠川先生を連れていく、鞠川先生は俺達の仲間なんだよ！」

「フッフッ、貴方のような頭の良いだけの問題生徒が何を言ってるんですか？毒島さんの様な優秀な生徒の後ろに付いて回るしかできないくせに」

紫藤は笑いながら俺にそう言った

「さぁ、鞠川先生こちらに残ってください」

「おい、まだ分からねえかぁ！！鞠川先生は俺の仲間だって言ってんだろうが！！」

「だから貴方のような「四度目は言わねぇぞ、鞠川先生は俺の女だ！！俺が連れていく！！」

俺は紫藤の顔の目の前に刀を突き付けて言った

「ハッハッ、キミはそんな事する生徒じゃないはずですよ」

紫藤は苦笑いしながら言った

「もう前の世界とは違うんだよ、全てがな」

俺はそう言って刀を下ろし鞘にしまった

そう前の世界は終わったんだよお前の知ってる月夜龍はもうこの世に居ないんだよ

「みんなバスから降りるぞ」

「え！？」

沙耶は一瞬驚いて俺の言ったことを聞き直して来た

「だからバスから降りるぞ」

「あっ、うん分かったわ」

そう言ってみんなバスから降り、俺は最後に紫藤に一言言って降りた

「紫藤、今度俺に会ったら俺に斬られないように気をつけろよ一瞬で殺してやるからな」

そして俺達はバスから降りて話し合った

「あ、あのさぁ先輩？」

「ん、なんだ？」

沙耶が真剣な顔で話しかけて来た

「先輩でもキレる時はキレるんですね」

「あっ、そう言えば私もお兄ちゃんのキレたとこ初めてみたビックリしたなぁ」

「なぁんだよ、そんな事か俺だってキレる時はキレるさ、あっ、でも大丈夫だぞレディにはキレないから俺は優しいから」

「別にそんな事気にしてないわよ！！」

沙耶が怒鳴って言った

「そう怒るなって」

「怒ってないわよ！！」

「ん、それじゃあ、とりあえず橋を渡る手段を考えるぞ、沙耶も異議ないな？」

「ないわよ！！」

こうして俺達はバスから降りて孝との待ち合わせの場所に向かう手段を考えるのだった

一時の安心感？（やすらぎ）（後書き）

すこし変えました＞＜

終焉の夜Ｎｏ．１（前書き）

またまたの投稿ですが
携帯で書いているのであんまり長く書けません……すいません

終焉の夜Ｎｏ．１

アレから俺達は橋を渡る手段を考えたが想い浮かばなかった

それでどの橋も規制をしているなら孝逹も橋を渡ってないのではないかと言う意見が出た

それならこの付近を探したら居るのではないかと想い俺達は付近を探した

そしてバイクに乗っている孝逹を見つけた

それから鞠川先生がどこかで休まなければ夜が来ると言う事で鞠川先生の友達のアパートに行き休むことにした

「へぇ～、スゴいですね本当に戦車見たいだ」

「そうでしょ！！そうでしょ！！」

俺達はアパートに止められていた戦車（鞠川先生いわく）を見て驚いていた

まぁ、コータは1人で興奮してだけどな

「なぁ、このアパートにも奴らが居るかも知れない気をつけて入れよ」

俺は皆にそう言ってアパートに入ろうとした時奴らがアパートの中から出てきた

「やっぱり出てきたかよ、ご期待にお応えしてくれてありがとうよ！！」

俺はそう言って奴らの首を切った

「小室くんは右を頼む、私は左を押さえる！」

冴子はそう言って次々と奴らを倒していった

そのかいあってアパートの中にいた奴らは全て倒してもう入って来ないようにアパートの門を閉めた

それから俺達はアパートに入り鞠川先生の友達の部屋でいろいろと使える物がないか探した

女性陣は沙耶の提案で風呂に入る準備をして風呂に入りに行った

その間に孝やコータは銃弾を見つけたらしく鍵の付いた所を無理やり開けていた

「これで何にも入ってなかったら悲しいな」

「絶対入ってるよ銃弾があったんだ」

「じゃあ行くぞ、せぇーの！！」

そしてバギィと言う音と共に鍵が壊れ扉が開き三丁の銃が現れた

それを見てコータは興奮していた

俺はそれを見ながら斬龍の手入れをしていた

すると後ろから手が伸びてきた

「りゅうく〜ん」

俺はすぐさま後ろを振り替えると風呂から上がってタオル一枚の鞠川先生のがいた

「ちょっと鞠川先生！どうしたんですか！？まさか酔ってるんじゃ？」

「ちょっとちょっとだけよ、あっ！それとりゅうくん今日バスの中でしずかのこと俺の女って言ったでしょ？」

「あっ、すいません！勝手にそんなこと言って！」

俺はそう言って頭を下げた

「別に……」

「えっ？何ですか？」

「別に、別に！嫌じゃなかったもん！しずか嬉しかったもん！！」

「えっ？本当ですか？」

「だからお返しとしてりゅうくんからキスして！！」

そう言って鞠川先生は唇をつき出した

えっ？俺？キスしちゃって良いの？

「じゃあ遠慮なく」

俺はそう言って鞠川先生にキスをした

「ありがとう、りゅうくん元気出たわ、それじゃあしずかは寝てくるね、おやすみ～」

「ちょっと待ってください鞠川先生！！孝！！鞠川先生について行け」

「ぼ、僕ですか？」

「行ってこい！！孝、その代わりエロいことはするなよ」

俺はそう言って孝と鞠川先生の後ろ姿を見送った
そして俺は鞠川先生とのキスで少し興奮した体を平野と少し話をして誤魔化した
その後、キッチンに居る冴子の所に向かった

「女とは時にか弱く振る舞いたいものだ」

俺がキッチンについたときは鞠川先生に付いていった孝が冴子と話をしているところだった

「先輩もですか」

「友人には冴子と呼んでほしいよ」

「さ、さ……」

「練習してからでいい」
冴子は少し笑ってそう言った
そして孝は先程から麗が孝を呼んでいたのでそちらに向かった
俺は孝が居なくなったのを確認しキッチンに入って行った
「何してんですか、毒島さん？」
「ん？あぁなんだ龍か」
「こんばんは毒島さん」
「なぜそんな口調なのだ、龍？」
「ん？別に理由なんてないよ、適当にやっただけ」
「そうか」
「それにしても、何だよその格好？裸エプロンにティーバッグ？襲って下さいって言ってるもんじゃないか、なぁ冴子？」
俺はそう言いながら冴子を後ろから抱き締めた
「襲ってみるか？」
冴子は動じた素振りも見せなかった
「う～ん……また、今度にしとくよ今日は他に良いことがあったしな」

俺はそう言って冴子から離れキッチンを出た、もう直ぐ現れわるであろうアリスとその父親を見つけ、助け出すためにベランダに行き望遠鏡で周りを見渡した

終焉の夜Ｎｏ．１（後書き）

文才なくてすいません……キャラを壊してすいません
本当にすいません
そして読んでくれてありがとうございます（つД⊤）
ほんの少し変えました＞＜

終焉の夜（きょうふ）Ｎｏ．２（前書き）

またまたの投稿です

終焉の夜（きょうふ）Ｎｏ．２

ベランダで俺が双眼鏡で周りを見渡しているとコータがベランダに来た

「アレ？先輩も見張りですか？」

「ああ、そんなところだコータも見張りか？」

「はい！だって銃が手に入ったんだからここで構えて見張りしたいじゃないですか？」

コータは拳を強く握り目をキラキラ光らせながらそう言った

すると麗と居た孝がこちらにやって来た

「どうしたんですか？さっきから犬が吠えてるけど？」

「まだ生きてる奴らが下で奴らとやり合ってるんだよ」

俺は下を見ながら言った

すると、夜食を作っていた冴子もやって来た

「畜生、、ひどすぎる…」

孝はそう言ってイサカを構えようとした

「小室っ」

「なんだよ？」

「撃ってどうするつもりなの？」

「決まってるだろ！奴らを撃って…」

「忘れたのか？奴らは音に反応するのだぞ小室君」

孝はそう言われると拳を強く握った

「……！」

「そして……」

冴子はそう言いながら部屋の明かりを消した

「生者は光と我々の姿を目にして群がってくる……むろん我々は全ての命ある者を救う力などない！！彼らは己の力で生き残らねばならぬ、我々がそうしてるように、何が言いたいかは分かる宮本から聞いた、君は過去一日に対して厳しくあるものの男らしく立ち向かってきた、だがよく見ておけ、慣れておくのだ！もはやこの世界はただ男らしくあるだけでは生き残れない場所と化した」

そう言って冴子は孝にキツくあたり孝に双眼鏡を手渡した

「毒島先輩はもう少し違う考えだと思ってた……」

孝は一階に行こうとする冴子にそう言った

「間違えるな小室くん私は現実がそうだと言っているだけだそれを好んでなどいない」

冴子は孝の方に振り向きそう言うと一階に行った
俺はその話を聞きながらベランダから下を見続けていた
「あ、外を見るときはこっそりやってよ」
コータは孝にそんなことを言っていた
それを聞きながら孝は双眼鏡で下を見た
「……地獄だ」
孝はそう一言だけ呟いた
「……こんなもんじゃないよ……地獄は……」
ふと誰かがそう呟いた
俺は直ぐに後ろを振り向くとそこに先程まで寝ていた恋夏の姿があった
「恋夏？どうしたんだ？こんなもんじゃないってどう言う意味だ？」
俺は恋夏に聞いた
しかし恋夏は答えようとせずまた一階に戻って行った
「どうしたんだぁ？恋夏のやつ……」
「先輩大丈夫ですって恋夏さんもこんなことになって気が動転してるんでしょ」
「そうだよなぁ」

俺はそう自分に言い聞かせまた双眼鏡でアリスを探した
すると孝が俺に質問してきた
「月夜先輩も毒島先輩と同じ考え何ですか？」
「ん、どうしたんだぁ行きなり？」
「聞きたかったんです、月夜先輩の考えを」
「そうか……そうだなぁ、俺の考えも冴子と同じだ」
「そうですかぁ……」
「でも１つだけ冴子と違う意見がある」
「何ですか？」
「救いたいなら救え！」
「えっ！？」
「人を救いたいのなら救えば良い！その代わり覚悟もいる、全員を救うことはできない、１０人中１人しか助けられないかもしれないもしくは１００人中の１人しか助けられないかもしれない最悪１人も救えないかもしれない！それでも救えなかった人のことを忘れなくちゃいけない！その覚悟があるか？」
「何で忘れなくちゃいけないんですか？」

「そんなこと1人1人覚えてたら死ぬぞ絶対に…」

「……」

「分かったか、でもお前には無理だ今はどんな状況か見ておけ」

「じゃあ、先輩も同じ考えなんですね…」

孝にはやって見せないとダメだな

「はぁ～、仕方ないなぁ～見せてやるよ俺の考えを」

俺はそう言ってベランダから飛び下りた

「「えっ！？」」

孝とコータはいきなり俺が飛び下りたので驚いていた

「お～い、そこから良く見とけよ！これが俺の考えだ！」

俺はそう言って外の奴らを倒しにかかった

くそぉ～！やたらと居やがるなぁ、軽く１０体はいるな、倒せるかぁ？

アリス達も見つけなきゃ行けないし

まぁ、近くの奴らからやるか

「行くぞ～！！」

俺はそう言って近くの奴らに斬龍で斬りかかった

まず一体目はこちらに気づいていたので向かって来る勢いを利用し

足を斬った、そして足を斬られて倒れた奴らの頭を足で踏み潰して言った

「Ｅｒｓｔｅａ！！（一体目）」

終焉の夜（きょうふ）Ｎｏ．２（後書き）

ほんの少し変えました＞＜

命の壁（はし）（前書き）

頑張ってまた投稿します
自分的には頑張ったんですが……やっぱり文才がないからダメだな……
あと、誤字や修正したほうが良いところなどの意見を待ってます、
お願いしますm（__）m

命の壁（はし）

さぁ、どうするかなぁ？
う～ん……

俺は悩んでいた勢いよく外に出て奴らを1体倒したのは良いけどその時の音で奴らが群がって来たのだ

どうしようかなぁ？奴らを倒すのはいいとして、アリス親子はどこにいるんだぁ？アッチか？それともコッチか？クソォ～分からねぇ～！！

俺はそう考えながらも襲ってくる奴らは確実に倒していた

仕方ないなぁ、感に頼るかぁ…俺の感は～？う～ん……コッチだ！！！！

俺はそう言って奴らがあまりいない方に向かった

いや、別に逃げた訳じゃないからね！こっちの方にアリス親子がいると思っただけだからね！！

俺がそんなことを考えていると小さな子の声が聞こえてきた

「パパと一緒にいるぅ、ずっとパパと一緒にいるのぉ！！」

あの声って！まさか！？アリスの声！？

そう俺は気づくのが遅かったのだ、その声は紛れもなくアリスの声

だった、そしてその時すでにアリスの父親は死んでいた
「くそぉ！！意味がねぇじゃねぇか！！外に出てきた意味が！！！！」
俺はそう言いながらアリスの声で集まる奴らを片っ端から斬っていった
コータも銃で狙撃していてくれたのであまり奴らは多くなかった
俺は走ってアリスの元に向かい家の門に鍵をかけた
「大丈夫？」
「大丈夫……でもパパが……」
アリスの目線の先には無惨にも父親の死体があった
それを見た俺は庭に干してある洗濯物の中から白いシャツをとり父親の顔をおおい、どこにでも生えてそうな花を一輪、父親の頭の上に置いた
「君のお父さんは君を守るために命を落とした、立派なお父さんだよ」
そう言って俺はアリスを抱き寄せた
「パパ……あぁ！！あぁぁぁあ！！！！」
アリスは大声を出して泣き出した
「大声だして泣きな、門はちゃんと閉まってるから奴らは入ってこ

ない、だから思いっきり泣くんだ、後になって泣かないように、今のうちに泣いておくんだ」

俺はそう言ってアリスをよりいっそう強く抱きしめた

そうだよな、もうこの子は泣くしかできないんだよな……っ！！何が立派なお父さんだよだ！！立派だろうが死んだら意味ないだろ……クソォ！！！！

その後、数分アリスは大声を出して泣いていた

そして泣き止んだ後アリスは俺に話しかけてきた

「ねぇ、お兄ちゃん……」

「ん？何だ？」

「どうやって……ここ逃げるの？」

「えっ！？そうだなぁ……」

俺は忘れていた、アリスの父親を助けられなかったことで完全に焦っていたのだそして必死に考えた

門の外は奴らだらけ、しかしこの家のヤツは頼りにならない

「どうしよかぁ？」

「お兄ちゃん……上に逃げれば良いんじゃない？」

アリスは上を指差して言った

「あっ！そうか！！ありがとうアリス！！」

「えっ！？うん…」

そうだ、塀を歩けば良いんだ！奴らは壁を登れない、大きな音をたてなければ大丈夫だろ！

「それじゃあ行くよ、お兄ちゃんに捕まって！」

俺はそう言っておんぶをするため体制を低くした

「じゃあ、乗るよお兄ちゃん？」

アリスはそう言って俺の背中に乗った

それから俺は塀に登り冴子達がいる方に向かった

今は、あれから少し進んだところだ

するとアリスが突然、トイレしたいと言ったのだ

当然、あるとは思っていたが突然言われるとこちらにも心の準備が必要だ

しかし、俺の心の準備など待っていてくれるほど相手は優しくなかった

「お兄ちゃん！！もう出るぅ！！」

「えっ！？ちょっ！！」

「お兄ちゃん！！我慢できない！！！！！」

「くそぉ！！いいよ、ここでしちゃいな！」

「良いの？お兄ちゃん？」

「大丈夫だから、いいよ！」

「んぅ～～」

アリスがそう言った後俺の背中に温かいものが流れた

「アハッハッハッハッ……」

もう俺は笑うしかなかったそして俺は笑いながら塀を渡ったすると遠くから車の明かりだと思われるものが近づいてきた

「アレって！？」

俺は近づいてくる車をよく見ると車の上に冴子が乗っていた

「アレってお兄ちゃんの知り合い？」

「ああ、大切な仲間だ！！」

車は俺の横まで来て止まった

「川向こう行きの最終便だが乗るかね？」

「ああ！！」

「それじゃあ先にその子と犬を預かる」
良い忘れていたがジークも一緒に連れて来ている
「あぁ、分かった！気をつけろよ！」
「それじゃあ、おいで」
冴子はそう言ってアリスとジークを預かった
「じゃあ、俺は飛び移るから冴子、退いてくれ！」
「何を言っている、誰が龍を乗せると言った？」
「えっ？」
「それじゃあな、龍！」
「えっ！？ちょっと！！待ってくれよ！！てか、鞠川先生も本気で走らせない！！あと、沙耶！手を振るなぁ！！それと孝なんで手を合わせて拝んでるんだよ～！！」
俺は塀から降りて車を追って走った
奴らは車がひいてくれるので襲っては来なかった
「ガチで待ってくれぇ！！！！！！！！！！！！それと沙耶いつまでも手降ってるんだぁ！！！！！！！恋夏も便乗して手を振るなぁ！！！！！！！後なんでコータ俺に銃向けてんだよ！！」

俺はそう叫びながら車を追って走った

命の壁（はし）（後書き）

どうでしたかぁ？
感想待ってます！！よろしくお願いいたします
少し変えました＞＜

新しい今日（じごく）（前書き）

やっと投稿しました
文才ないのでストーリーを考えるの下手だし、面白くないし……
本当にすいません

誤字脱字や訂正した方が良いと思ったところがあったら感想よろしくお願いします
m（__）m

新しい今日（じごく）

「「漕げ漕げ漕げよボートを漕げよ～♪」」

今は車で川を渡っている最中だ
先程から聞こえくる歌は車の上でコータとアリスが歌を歌っているのだ

さてと話は変わるがアノ後俺がどうなったかと言うと、アリスを助けた後、俺は冴子達に置いていかれて全力で走って車を追いかけたそしてもう少しで手が届くといった時だった

「とどけぇ～！！！！」

キィィィーーー！！！！

その時、車はかん高いブレーキ音を立てて止まり、それによって俺は突き指と顔面打破を味わった
まぁ、その後ちゃんと車には乗せていただきました
そしてそんなことがあって今にいたるのだ

そしてもうすぐで川を渡りきる
鞠川先生も運転席から後ろを向いてみんなに伝えた

「みんな起きて！そろそろ渡りきっちゃう！」

その声を聞いて麗が一人だけ起きた
他にも孝、冴子、恋夏の３人が寝ているが起きるそぶりも見せなかった

ちなみに恋夏は俺の膝を枕代わりにして寝ていて、冴子は俺の肩にもたれて寝ている
孝は麗の横で寝ている

「お～い、起きろよ！恋夏！」

俺はそう言って恋夏の肩を揺らした
すると恋夏は「う、うん？」と言う可愛い声と共に恋夏は起きた

「よう、恋夏、おはよう眠れたか？」

「う～ん、おはよう！お兄ちゃん♪」

「もうすぐで川を渡りきるからな」

「もう、渡りきるんだぁ？早いね♪」

「そうだな、お～い、冴子も起きろよ～？」

俺は肩にもたれて寝ている冴子を起こした

「ん？」

「おう、起きたか？冴「毒島先輩？ヨダレ垂れてますよっ♪」

俺が喋っていると恋夏が割り込んできた
恋夏の言葉を聞いた冴子は急いで口元を拭いた

「先輩♪ヨダレ垂らしながら寝るなんて恥ずかしいですね♪」

恋夏は俺の腕に抱きついてニコニコ笑いながら言った冴子もそうとう恥ずかしかったのか、顔を赤くして下を向いている

「あんまり気にするなって、冴子？大丈夫だって、この事は俺の記憶の一部として永遠に語り継がれるだけだから♪」

「お兄ちゃん？それフォローになってないから！」

恋夏は俺になぜかツッコミをいれてきた

「ウソ！？マジで！俺からしたら最高のフォローだったのに！」

「お兄ちゃんはいつもどんなフォローを受けてるのよ！？」

「そうだなぁ～、冴子からのフォローはほとんどか、シカト、ムシ、放置だな！たまに木刀で殴られる！！」

「それフォローじゃないよ！ただの嫌がらせだよ！！」

まぁ、そんなこんな恋夏と話をしているが恋夏もヨダレを垂らしながら寝ていたのでヨダレの跡がくっきり残っているのだ

まぁ、内緒だけどね！

そして恋夏と話をしている途中、麗は孝を起こした

冴子もいつも通りに戻った

「じゃあ、みんな降りるか♪」

「えっ！？」

恋夏がなぜ？という顔をした

「だって、堤防登らなくちゃいけないし、冴子たちもそんな服装では恥ずかしいだろ？」

俺はそう言って車から降りた
その後にみんなも降りてきた
最後は車の上に乗っていた２人だった

「小室手伝ってくれありすちゃんを降ろす」

コータがそう言うと孝はあるすちゃんを降ろすのを手伝った
そして孝がありすちゃんを受け取ろうと手を伸ばしたときありすちゃんはスカートをおさえとあたふたしていた

「あの、あの、あの」

「ん？」

孝はその理由が分からなかった
まったく、孝のヤツ、女心を理解してないなぁ
俺は孝の代わりにありすちゃんを受け止めようとした
ありすちゃん、俺は孝のような失敗はしないよ！！君の言いたいことは全て理解した！！！！

「おいでありすちゃん♪」

「あの、でも」

「分かっているよありすちゃん♪お姫様抱っこでおろしてほしいん

だろう？さぁ、おいで！」
俺は笑顔で手を広げありすちゃんが来るのを今か今かとまった
「お兄ちゃん？もう良いよ……」
恋夏は俺の姿を見て残念そうに言った
「えっ？違うの？違うの？」
俺が恋夏にそう聞いていると冴子が来て、ありすちゃんを車の上から受け取った
「龍はあっちに行っておけ！私達は着替えるのだ」
冴子はそう言って、ありすちゃんと一緒に鞠川先生たちのいる方に向かった
恋夏は遅れたけどちゃんとみんなのいる方に向かった
「ワンッ！」
「お、相変わらず元気なことで」
この小さい犬の名前はジーク、俺は名前がアンドリュウが良いと言ったのだが、コータの熱意に負けてしまった
「あの、先輩これ使いませんか？」
「うん？」

コータがイサカを持って聞いてきた

「いや～、その俺は『斬龍』があるから良いよ、孝に渡してくれ」

「えっ、でも刀なんて……」

コータは何か言いたそうだった

「どうしたんだぁ？刀はすぐに折れると思ってるのか？」

「いや、その！あの……はい……」

「まぁ、そう思うのが当たり前だけど、俺の『斬龍』は折れないよ」

「でも、そんなの……」

「う～ん？じゃあ、銃と刀でやり合ってみるか？」

「えっ！？それって」

コータはアタフタしながら言った

「そう、殺り会うんだ」

「それじゃあ、先輩の方がふりじゃ……」

コータはそう言いながら下を向いた

「やってみないと分からないよ、どうだ？やってみるか？」

「……は、はい・・・」

コータはそう言って俺の顔を見た

新しい今日（じごく）（後書き）

少し変えました><

少し遅めの主人公紹介

今回は主人公＋その他の紹介をしたいと思います

月夜　龍

性別／男

身長／１７８ｃｍ

体重／６９？

年齢／１７歳（実年齢約３４歳）

血液型／Ｏ型

特徴／紙は少し長め、色は黒色、そしていつもニコニコしている

家族／父親、母親、妹の４人家族（ペットは犬のグリス）←嘘ｗｗ

好きなもの／アニメ、刀（斬龍）、仲間、のど飴

嫌いなもの／口うるさい教師、誉められること、裏切者、ゴキブリ

能力／

体力Ｓ＋

腕力Ｓ＋

知識Ｓ＋

速さＳ＋

技術Ｓ＋

まぁ、主人公のプロフィールはこれくらいにして次は月夜恋歌の紹介です

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ

月夜　恋歌

性別／女性

身長／１６７ｃｍ

体重／禁即事項です♪

年齢／１６歳

血液型／Ａ型

特徴／髪の毛は長く髪型はポニーテール、色は栗色、そして極度のお兄ちゃん子

家族／月夜龍と同じ

好きなもの／お兄ちゃん、甘いもの、ぬいぐるみ、グミ

嫌いなもの／お兄ちゃんと仲の良い女友達、虫

能力

体力Ｂ

腕力C
知識A
速さB
技術C

まぁ、こんなものでプロフィールができました♪
では、ここでゲストの月夜龍さん、恋歌に一言もらいましょう〜！！！！

「えっ！？そんないきなり言うなよ！う〜ん、そうだなぁみんなこれから頑張って行くから応援よろしく！！……はい！次恋歌！」

「ん？えっとねぇ〜、私はお兄ちゃんが好きなので応援よろしくお願いします！！ぺこっ」

「ちょっとまて、恋歌いまの発言の中でお前の兄としてほっておけない箇所があるのだが？お兄ちゃんがなんたらかんたら……？」

「別に良いじゃん♪本当に好きなんだから？」

「ダ、ダメd『はい！そろそろお時間が来ましたのでこの辺でさようなら〜バイバイ〜♪』

「恋歌ぁお兄ちゃんは許さないぞ〜！！お兄ちゃんより良い人を探しなさぁ〜〜い！！！！！！」

少し遅めの主人公紹介（後書き）

ほんの少し変えました＞＜

番外編：悪夢の始まる前のお話（前書き）

番外編を書いてみました！
まぁ～できた感じはボロボロですが、よろしくお願いします＞＜

番外編：悪夢の始まる前のお話

これは悪夢が始まる何ヶ月も前の、ある日のはなしだ

「お兄ちゃ～ん！！！！」

大きな声で誰かが俺のことを呼んでいる
この声は女性の声だ
多分、俺のよく知っている相手だろう
しかし俺はそのことに返事をする気など全くない
すると相手も何度も俺のことを呼んだ
だがどれほど呼ばれようが俺は返事など絶対にしない
なぜなら

「お兄ちゃん！！早く起きてよ！！もう朝だよ！！遅刻するよ？」

そう俺は今自分の部屋で布団の中と言う楽園（エデン）にいるのだ
俺を楽園から追い出せるものなら追い出してみろ！！
絶対に『知恵の実』などに手は出さんぞ！
ヘビにそそのかされようが、美人が誘惑してこようが俺は絶対に「バサッ」
えっ！？
それはいきなりの事だった、俺はいきなり楽園を追放去れたのだ
その一瞬の出来事を俺の頭は理解できずに、いきなり身ぐるみを全て剥がされたように目が点になっていた
しかし俺はその事を理解しようと思い脳をフルに回転させ、なぜ楽園を追放されたのか理解した

そして俺は枕に埋めていた顔を上げ、俺を楽園から追放した張本人を見た

「お兄ちゃん？あ・は・よ・う♪」

顔を上げたそこには、恋夏の皮を被った鬼、いやアレは鬼神だ
そう鬼神が俺の顔を見て、額に青筋を浮かべ笑っていた
この時、俺は確信した
ヘビにそそのかされようが美人が誘惑してこようがそんなことはそよ風を体で受けるくらいのことだったのだ
本当に恐れなければいけなかったことはこの事態だ
だがもう遅すぎる、鬼神はお怒りなのだ
誰かを生け贄として捧げなければ怒りはおさまらない、そしてその生け贄が俺なのだ
あぁ、父よ母よ今まで育ててきてくれてありがとうございました、妹よこんな俺に優しくしてくれてありがとう、冴子よ俺のボケに一生懸命ツッコンでくれてありがとう
さぁ、殺せ！一思いに殺してくれ！
主よ、今あなたの所にむかいます

「いい加減に起きなさぁ～い！！」

ドカァ、バキィ、グシャ、ボキィ、ギャァ～
……チィ～ン

俺の腕は曲がってはいけない方向に曲がったり聞こえてきてはいけない音までもが聞こえてきたりとか聞こえてきてないとか……

と言うのは嘘で♪
恋夏は俺の楽園を奪って、少し怒っていたが、俺の方を見ると顔を

真っ赤にして俺の部屋から出ていった
俺は不思議に思ったが、下半身に目をやった時に理由が分かり、恋夏の誤解を解くため急いで立ち上がり恋夏を追った
「恋夏！ちょっと待ってくれ！誤解だ誤解なんだぁ！！！！！」
「いやぁ～！！お兄ちゃんのエッチ！！！！！」
「お願いだぁ～！！待ってくれぇ～！！」
俺はそう言いながら恋夏を追った

今俺達は朝の少しした事故から時間がたち
学校に登校していた
「全く、一時はどうなるかと思ったよ～」
「うっ、だってお兄ちゃんが悪いんじゃない／／」
「アレは仕方ないの健全な男性なら普通になるの」
あの後、恋夏は親がいるリビングに行った
俺はその間、恋夏が親に言わないかどうかビクビクして朝食を食べた
そして、登校時間になり俺と恋夏は一緒に家を出た
「なぁ、恋夏ぁ？」

俺は少し歩いたが気まずい雰囲気に黙りかねて恋夏を呼んだ

「……」

しかし恋夏は俺が話しかけるとあからさまに俺を無視する

「なぁ、恋夏？アレは事故なんだよ？分かってくれよ～なぁ？」

「……」

はぁ、また無視かぁ～

悲しいなぁ～

「……バカ……なんて……い」

「えっ！？なんて言ったんだ？」

俺は恋夏の小さな声を聞きたくて耳を限界まですました

「お兄ちゃんのバカ！！お兄ちゃんのことなんて大嫌い！！！！」

恋夏はそう叫ぶと走って行った

「えっ？……ちょとまてぇ～！！！！」

俺は恋夏にそう言われてなぜ嫌いなのか気になって、少し考えながら恋夏を追った

何で嫌われなきゃいけないんだぁ？別にアレくらいで嫌いになるも

のなのかぁ？う～ん……まさか！？恋夏のヤツ！！

「まてぇ～恋夏～！！少し落ち着け！」

俺は恋夏に嫌われる節を思いつき全力で恋夏を追った

しっかしアイツ、どんだけ足速いんだよ！俺より少し遅いだけじゃないかぁ！？

「ちょと待てよ恋夏！」

俺は恋夏に追いつき肩を掴んだ

「話してよお兄ちゃん！！」

「話を聞け恋夏！お前の考えていることは間違いだ！誤解なんだよ！」

「お兄ちゃんに私の考えてることなんて分からないでしょ！！」

「分かるさ！！お前の考えてることぐらい！」

「じゃあ当ててみてよ！」

恋夏はこちらに振り向いた

振り向いた恋夏は涙目になっていた

「恋夏、冴子は関係ないぞ？」

「えっ！？」

「お前は俺が冴子のことを考えてああなってたって思ったんだろ？」

「…違うの？」

「違うよ！朝は絶対にああなるの！かの有名な主人公も言ってるだろ『仕方ないだろぉ、朝なんだからぁ！！』って」

「ホントにホント？」

恋夏はなぜか涙目＋上目使いだ
くそぉ！何で上目使いなんだぁ！！しかも涙目！！くそぉ！！抱きしめたい！！抱きしめたい！！
しかし俺はその感情をおさえた

「ホントにホントだ、お兄ちゃんが嘘ついたことないだろ？」

「うん♪」

恋夏は満面の笑みで答えた
こうして俺の無実は立証されたのだ
そして今にいたるのだ

「ねぇお兄ちゃん♪仲直りの証しに手、繋ごう♪」

恋夏はそう言って手を差し伸べてきた
くそぉ！！またかよ！！握りたい握りたい握りたい握りたい握りたい握りたい！！！！！！！！！！そう握りたい！！！！

「仕方ないなぁ、今日だけだぞ～」
俺はそう言って恋夏の手を握った
何だよぉ！仕方ないだろ！！握りたいんだから！！
俺はそう心の中で思った
「お兄ちゃんそれ恋人結び／／／」
「あっ！すまん！！」
俺は急いで手を離そうとした
「イヤッ！！」
恋夏はそう言って俺が手を離さないように強く握りしめてきた
「恋夏？」
「嫌じゃないから……離さないで／／／」
恋夏は下を向いて小さな声でそう言った
下を向いた恋夏の顔は真っ赤だった
「しゃあない、じゃあ学校までだぞ」
「うん♪」
恋夏は下を向いていたが俺がそう言うと顔を俺の方に向け元気に微笑んだ

オマケ♪

「なぁ、恋夏？もう学校の近くだから手、離さないか？さっきから他人の視線と殺気を背中にビンビン感じてるんだけどぉ～」

「ダァ～メ♪」

この時俺は恋夏には絶対に勝てないことを理解した
あぁ～あ、情けない兄貴だなぁ～

この後、俺達は靴箱までずっと手を繋いでいた
そして、その場面を見た冴子に思いっきり殴られた
なんで殴るの・・・・（泣）

番外編：悪夢の始まる前のお話（後書き）

誤字、脱字、修正点がありましたら
感想に書いてください
少し変えました＞＜

沙耶の家族Ｎｏ．１（前書き）

まぁ自分には文才がないので皆さん期待なんかしてないと思いますが……

あと感想待ってます♪

沙耶の家族Ｎｏ．１

「本気でやれよ！コータ！でなきゃ、刀の強さを見せつけられない！」

「はい！分かってます！！全力で行くんで死んでも恨みっこなしですよ！！」

「ああ、分かってる！！」

俺はそう言って斬龍を構えた

コータもイサカを構えた

ショットガンってせこいよね・・・・？

「……」

「……」

「ねぇねぇ、お兄ちゃんたち何してるの？」

「えっ！？」

意識を集中しているなか俺はいきなり服を引っ張られそう言われた

「ねぇねぇ、お兄ちゃんたち何してるのって！」

俺が振り向くとありすが俺の服を引っ張っていたのだ

「ちょっと待ってありすちゃん、お兄ちゃんたちは今大切な事をし

てるから離れててくれるかな？」
「う～ん、大切な事ってなに？」
ありすは不思議そうに首をかしげて聞いてきた
「えっとね～、それは～？」
俺はありすに直接やりあってるなんて言わず言葉に困っていた
その間コータも少し困った表情をしていた
「どうせ、龍のことだ、無駄なことだろ？そんなことサッサッとやめてこちらに来いバカ！」
俺が考えていると冴子がやって来て耳をつかまれて連れていかれた
「痛い！痛いって冴子！離してくれよ！」
「離して欲しければこちらに来い！まったく、無駄なことをしてたものだ！」
冴子はそう良いながらも離してくれず結局鞠川先生や、沙耶がいるところに連れていかれた
「さっきは何してたの？平野くんと怖い顔して睨みあってたけど？」
ありすと同じことを鞠川先生も聞いてきた
その返事にも俺は困った
すると沙耶が俺の姿を見て言った

「せいぜい、銃と刀のどちらが強いとか決めてたんじゃない？くっだらない！！」

俺は何も言ってないのに沙耶は確実にやっていたことを当ててきた

「うそ！？月夜くん、平野くんとケンカしようとしてたの？」

「ハッハッハッハァ……」

俺は笑って誤魔化した

まぁ、その後ありすと鞠川先生にケンカは良くないと何回も言われ、沙耶にはバカ呼ばわりされた

その間、コータは孝に銃の使い方を教えていた

まぁ、俺が孝に銃の使い方をコータに教われと半命令形なことを言ったせいだとは誰も思うまい

その後、冴子、麗、沙耶は服を着替えた

冴子は少し恥ずかしそうだった

そしてそこを俺が指摘したら木刀で思いっきり殴られた、あとなぜか恋歌にも殴られた

う～ん、冴子が殴るのは分かるが恋歌にも殴られるわけが分からない？何でだ？

「それじゃあ堤防の上、見てくるなぁ～！！」

俺はそう言って堤防をかけ登った

「ハァ～ハァ～ハァ～」

俺は息が上がりその場に手をついた

「ドレだけ体力ないのよ！！！！」

その姿を見た沙弥は大声で突っ込みをいれてくれた

それを聞いた俺は立ち上がり沙耶に拳を向けて親指を立ててこう言った

「Ｈｅｌｐ　ｍｅ！」

「何で助けてなのよ！！！！」

そんなやり取りをもう少ししたあと俺は真面目にＯＫサインを送りそれを見た鞠川先生は車を走らせて堤防を登った

その後俺達は車に乗り込み街の中に入っていった

「なぁ、さっきから奴らが一人も目につかないんだが」

俺達は街の中を進んでいたしかし川を渡ってからというものの生きている人愚か奴らにもあっていない

「そう言えばそうね、住宅地のはずなのに一人もいないわ」

沙耶も窓から外をみて答えた

「沙耶もそう思うか、すいません鞠川先生！この先気をつけて走っ

てください」

俺は運転している鞠川先生の肩を叩いてそう言った

「ええ、分かったわ」

くそぉ、何か、何かあったんだよ！！この後に何かあったんだ！
原作は読んでるのにこの後の出来事だけが思い出せねぇ！！
しかし考えても考えても思い出せるわけがないのだマンガを見てから約１７年もたっているのだよっぽど強い印象を受けていない限りそんなもの覚えていられるわけがないのだ

それから数キロ進んだ時だった

「何で、こんなにいるのよ～！！」

先程まで全然いなかった奴らが突然沸いて出たように次々と現れた

「どうなってんだ！？いきなりこんなに……」

俺は大量の奴らを見て考えた
俺達の来た方は全然いなかったのにこちらには多くいる……奴らは音に敏感だ……ってことはこちらの方向に誰かがいる！？
まさか、沙耶の親か！？
でもそう考えるとなぜ、奴らはそこの人を襲わないんだ？立てこもってもいつかは奴らに襲われるでも襲っていない……それじゃあ奴らには破れない何かがある？でもこの先にそんなものは……

「だめよ、だめ、停まってぇぇ！！」

いきなり車体の上に乗っていた麗が叫んだ

「えっ？」

「ワイヤーが張られている！車体を横に向けろ！！」

鞠川先生はそれを聞いてハンドルを思いっきりきった
しかしそう簡単に車が停まるわけもなくワイヤーにぶつかった
だがそれでも車は停まらなかった

「！？滑りすぎてる！」

「停まって！なんで停まらないのよ！」

「人肉、い、いや血脂で滑っているのよ！！」

「先生！タイヤがロックしてます！！ブレーキ放して少しだけアクセル踏んで！！」

「え？ええ！」

鞠川先生はそう言ってブレーキを踏んだ

「先生ッ！前っ前っ！！」

孝は車体の上で鞠川先生にそう叫んだ

「あたしこう言うキャラじゃないのに！！」

そう言って鞠川先生は思いっきりブレーキを踏んだ
すると前輪がロックされ車体が前側に浮き上がった

「えっ？」

浮き上がったことによって車体の上に乗っていた麗が外に投げ出された
しかも運悪く、背中ををボンネットに強く打ち付けてしまい
立ち上がれる状況ではなかった
それを見た孝は銃を持って麗を助けに行った

「スライドをひいて」

「孝！」

「頭の辺りに向けて……撃つ！」

孝はコータから銃の使い方を教わっていたので奴らを次々と倒していった

「スゴイ……けど多すぎるなぁ」

孝は周りを見渡して言った
そう言いながらも孝は銃を撃ち続けた
コータも車体の上から銃を撃っていた

「ひょぉっ最高！！」

しかし撃ち続けたことによって孝の銃の弾が切れた

「弾切れかよ！！」
孝は焦ってポケットから弾を出した
「あっ」
だが弾を落としていまい奴らの方に転がって行った
「くっくそぉ！！」
「小室くん！！私が支えるその間に宮本君を」
冴子は孝の援護をするべくそとに出た
「ねぇ、お兄ちゃんも闘わないで良いの？」
車の中に残っている俺を見てアリスがそう言ってきた
「うん？お兄ちゃんかい？お兄ちゃんは良いんだよ今回は休憩♪」
俺は別にこの後に助けが来るのを知っているから大丈夫だと思ったアレ、じゃあなんでワイヤーの所は忘れてたのかって？それは仕様です
「じゃあ、アリスちゃん？お兄ちゃんはちょっと寝るから起こさないで……ね」
そう言って俺はこんな状況でも眠りに入った

それからどれくらいたったであろう……
俺は恋夏の叫び声で目が覚めた
「お兄ちゃんが！まだ車の中にお兄ちゃんが！！」
うん？なんだぁ？なに叫んでんだぁ？
俺はそう思ってワイヤーが張られていない方のドアを開けた……
「お～い、なに叫んでんだぁ？恋夏ぁ～……って！何だよこれ！！」
俺が外に出て見たものは
冴子も孝も恋夏も全員いなくて奴らだらけの所だった
「あ、あれ？みんなは？」
俺は周りを見渡した
「お兄ちゃんぁ！！！！こっち！！こっちだよ！」
「龍！こちらだ！！」
「キミ何をしている早くこちらに来なさい！！」
俺は声のした方を見た

そこには助けが来てワイヤーをこえた冴子達だった

「おぉ！みんなぁ～もうそっちに行ったのかぁ♪おいて行くなよぉ♪」

俺はそう言って歩いてワイヤーに近づいた

「お兄ちゃん後ろ！！危ない！！」

恋夏は思いっきり叫んだ

「えっ？後ろ……って！うわっ！！」

そこには大量の奴らが集まっていた

あちゃぁ～、大声出したのが失敗だったかぁ？

しゃぁない、やるかぁ

俺は斬龍を手にとり戦闘モードに入った

「ほら！かかってこぉ～い化け物どもぉ！！！！」

「いい加減にしなさい！！！！」

「えっ！？」

俺はいきなり誰かに襟を捕まれて引っ張って行かれた

「えっ！？ちょと待ってよ！？まだ一体も倒してない！！」

「みんな心配してるんだから危ないことはめっ！！」

この声？鞠川先生？

「ま、鞠川先生？」

「何？」

「いやぁ、そのぉ意外だなぁと思って」

「何が？意外なの？ハイ、ワイヤー潜るわよ」

「あ、はい」

俺はこうして意外な助け？によって無事ワイヤーの向こうにこれたのだ

その後、恋夏は抱きついて泣くし、冴子には殴られるし、沙耶には怒られるし、鞠川先生も何か怒ってるし、さんざんな目に会いましたぁ

そして冴子達を助けてくれた沙耶の母親にも怒られましたぁ……

そして怒られた後に

「死んだら、あの子達が可哀想よ」

と言われた

まぁ、かわいそうだな、（。ー。）（。＿。）ウンウンと思った俺だった

沙耶の家族Ｎｏ．１（後書き）

どうでしたかぁ？

文才がないの自分にはこのくらいの物しか書けないのです！！だから皆さんの力を貸してください！！

感想待ってます（´ε、ゞ

少しかえました＞＜

沙耶の家族Ｎｏ．２（前書き）

最後のほうがグダグダです

（´Д`）

感想待ってます！！！！

沙耶の家族No．2

アレから俺達は沙耶の母親に連れられて沙耶の家（屋敷）に来た
そこで俺達はきちんとお礼を言った
そしてその後、沙耶の母親は全員に部屋を用意してくれて俺達は1日を過ごした
そして次の日俺は用意された部屋のソファーで寝ていると誰かが入ってきて何かをし始めた

「た、孝ぃ」

「いくわよぉ、逃がさないでね、小室くん」

手を何かで濡らしている鞠川先生は裸の麗を押さえとくように言われた

「いたぃのぃやぁぁ〜」

麗は鞠川先生にこれからやられることをじたばたして嫌がった

「ひぇ、や〜ッ」

しかし孝が押さえているため逃げられずに麗の叫び声は屋敷中に響いた

「車から落ちたときに背中を打ったんだからお薬塗らないといつまでも痛いままよぉ」

鞠川先生はそう言いながらも麗の背中に薬を塗っていた

「はッッ、ひぐぅ」
麗は薬を塗られている間、痛みで声を出ないないように必死で頑張っていた
その間、孝も違う意味で頑張っていた
「はい、おわりっ」
鞠川先生はそう言って麗の背中から手をどけた
「裏切者ッ」
「な、なんでだよ薬塗るのてつd『あのさぁ、俺、寝たいんだけど？』
「「えっ！？」」
孝と麗は驚いた顔でこちらに向いた
「なんだよぉ、その顔は！俺は最初っからいたからな！！ずっとここで寝てたからなぁ！！」
「えっ、でもここって私の部屋じゃあ？」
麗はタオルで体を隠して言ってきた
「ちげぇ～よ、麗の部屋は隣、そしてここは俺の部屋！」
「うそ！？すいません！すぐに出て行きますからぁ」

「いや、もう良いよ、完全に目が覚めたし少しウロウロしてくるからぁこの部屋好きに使え、それじゃ」

俺はそう言って部屋から出ていった

はぁ、しかしこの家くそデカイなぁ～

俺はそんなことを考えながら歩いていた

すると涙目の沙耶がぶつかってきた

「イチッチッ」

「痛いわねぇ、どこみて歩いてるのよ！！……って、月夜先輩！？」

「って言う、そっちは沙耶じゃないかぁ？どうしたんたぁ？涙なんか流して」

「べ、別にアンタなんかに関係ないでしょ！！ほっといてよ！！」

沙耶はそう言いながらも手で目をこすって涙をふいていた

「別に関係ないけどさぁ？気になるじゃんかぁ？」

「……本当バカね…」

「いや～、一応これでもテストは全て１００点なんだけどなぁ～」

俺は頭をポリポリかきながら言った

「そう言うこと言ってんじゃないわよ！！」
「マジで！？じゃあ、アレか！今、地球（ちたま）で流行ってるって言うツンデレのツンの部分か！？」
「ハァ……」
「な、なんだ！？」
「いやぁ、呆れてるのよ」
「えっ？酷くない？一応これでも頑張ってるんだよ？」
「まったく、悔しいけど先輩といると嫌なことなんて忘れられるわねぇ」
「そう、誉めるなって沙耶、照れるだろ／／／」
「誉めるわよ……私より頭は良いし、優しいし、明るいし……」
「え？」
「うぐぅ、ぐぅ……うわぁ～～ん！！」
沙耶は今まで我慢していたのだろう、声を上げて泣き出した
「大丈夫か沙耶？どうしたんだぁ？話ぐらいなら聞くぞ？」
俺はその場に泣き崩れた沙耶の隣に座り沙耶を慰めた
すると沙耶が俺に抱きついてきた

「えっ！？さ、沙耶？」

「……ぉねがぃ…今はこのままでいたせてぇ……」

今にも消えそうな声で沙耶は俺に言ってきた、この時に沙耶がどれだけ傷ついているかが少し分かった気がした

「なぁ、沙耶？」

「……なに……」

「お前に何があったかは大体見当がつく、だからなお前に誰であろうとキツく当たる奴には俺が許さない……だから沙耶、お前は嫌なことがあったら俺に言ってこい！全部は無理だが少しなら俺が楽にしてやる！約束だ」

俺はそう言って沙耶の頭を撫でた

「ふん！！カッコつけて何言ってんのよぉ？私は天才よ！！」

「あぁ、そうだなぁ！お前は天才だよ！！」

これで沙耶の気持ちはおさまったと俺は完全に思っていた

さぁ、沙耶の機嫌もなおったし孝の所に戻るかなぁ

「沙耶？ちょっと孝の所に行こうぜ♪」

「……えぇ」

沙耶は先ほどまで元気だったのに一瞬だけ落ち込んでいるように見えた

うん？沙耶のやつ一瞬だけなんだか暗い表情になってなかったか？

俺はそう思いもう一度沙耶の顔を見たが沙耶は明るい顔をしていたやっぱり気のせいかなぁ？あっ！そう言えばコータに会うのを忘れてた

「沙耶、コータも連れていくぞ」

「そうね、たぶんあの軍オタなら銃をいじってると思うわ」

「じゃあ、迎えに行くか♪」

俺はそう言って沙耶と一緒にコータを迎えに行った

やはり、沙耶が言う通りコータは工具などが置かれている場所で銃をいじっていた

「よぉ、コータ」

「あ、おはようございます」

コータは一時、作業をやめて挨拶してきた

「良いって別に気を使わなくても」

「そうですかぁ？」

「そうそう♪」

「それにしても楽しそうねアンタ！」

「？」

「まぁ、良いわいつまでもいじってられるか分からないし」

「どうしてですか高城さん？こんな要塞みたいな屋敷だったら」

「電力や水の確保がどれだけ大変か考えたことないの？」

「え、えーとつまり」

「もう！アンタに説明するだけ面倒よ！！それより小室の所に行くわよ！」

「えっ！ちょっと待ってください！」

「早くしなさいよ！！」

「なぁ、沙耶？俺、先に行ってるからコータと一緒に来いよ」

「ええ、分かったわ」

俺は沙耶にそう告げると俺は孝の所に向かった

多分、こっちであってるよなぁ～

やけに広いから全然場所が分からん！

俺は一生懸命孝のいる所に向かって歩いた
すると孝の声が聞こえてきた
「いや、あの、変な意味じゃなくて！！」
俺は声のするほうに向かうと冴子とアリスと孝がいた、あとジークも
「何話してんだぁ？」
「あっ！りゅう兄だ♪」
そう言ってアリスが俺のそばに走ってきた
ちなみにりゅう兄ってのは俺のことだから
「おっ！アリス元気かぁ？」
「うん！アリス元気だよ♪」
「そうかぁ♪ジークも元気かぁ？」
「ワッン！」
「お前も元気か♪良かった良かった♪」
そう言って俺はアリスを抱き上げて冴子と孝の方に行った
「何してんだぁ？こんなところで？」
「ただの立ち話だ」

「そうかぁ、それじゃあ皆に話があるから麗の部屋に行こうぜ」
「なんだ話しとは？」
「これからのこと」
「そうか、それじゃあ行くとするか」
「あぁ、そう言えば何で冴子、お前着物姿なんだ？」
「ん？なんだ龍、可笑しいか？」
「いや全然♪逆にきれいだぞ♪」
「えっ／／／」
冴子は顔を真っ赤にして照れた
「あぁ～！！お姉ちゃん顔、赤くなってる！！」
「ち、違う！！これは決して照れてるわけではない！！」
「じゃあ、なんで顔、赤いの？」
「これはだなぁ～、え～と、そうだ！着物が暑いんだ！着物のせいなんだ！」
「じゃあ、脱ぐか？」
「えっ！？」

「だって暑いんだろ冴子？それじゃあ脱いじまえば良いんじゃないか？」

「／／／／／／／／」

「うん？どうしたんだ、冴子？」

「こんな、こんな龍以外の人が居るところで脱げるか！！！！！！」

そう言うと冴子はどこからともなく木刀を取りだし俺を殴った

そして俺の薄れ行く意識の中で１つの疑問が上がった

俺だけだったら脱いでも良かったの……か……ガクッ

沙耶の家族Ｎｏ．２（後書き）

感想待ってます！！！！
ほんの少し変えました＞＜

沙耶の家族Ｎｏ．３（前書き）

この話は前回投稿した奴を完全にて書きました＞＜
スイマセン＞＜
ずるいと思われますがスイマセン＞＜

沙耶の家族No．3

俺は冴子に殴られ0．5秒だけ意識を失った
しかしその後、目覚め冴子達と俺の部屋に向かった
たぶんまだ、麗は俺の部屋で寝ているだろうからだ
俺はそんなことを思いながら部屋に向かった

「ねぇ、なんでここなの・・・」

部屋について麗に事情を話すとあからさまに嫌な顔をされ、こんなことを言われた
そして俺たちが部屋に着いて少ししたくらいで沙耶達も来た

「ねぇ、どんな話なの？」

鞠川先生はバナナを向きながら呑気に言ったそう言った
先生何処からバナナなんて持って来たんだよ・・・・

「沙耶頼む」

俺は沙耶の方を見ていった

「話って言うのは、他のなんでもないわ、私たちがこれから先も仲間でいるかどうかよ」

「仲間って・・・」

「当然だな、我々は今より大きな結束力のある集団に合流した形になっている、つまり・・・・」

冴子は真剣な顔で言った

「そう！選択は二つきり！飲み込まれるか」

「別れるか・・でも別れる必要なんてあるのか？」

「孝・・外の状況を見ろ」

俺は孝の肩に手を載せて言った

「見てごらんなさい！」

沙耶はそう言って部屋の窓を開けた

「街は・・・・酷くなる一方だなぁ、それにしても手際良いよなぁオヤジさん右翼のエライ人だけあるよ」

「えぇ、凄いわ！それが自慢だった、今だってそうこれだけのことを一日かそこらで、でも・・・それが出来るなら・・」

その時、沙耶は泣いていた、口で強いこと言っていても心はボロボロなのだ

「高城・・・」

「名前で呼びなさいよ！！」

「ご両親を悪く言っちゃいけない、こういう時だし大変だったのはみんな同じだし「いかにもママがいいそうなセリフね！！」

孝は沙耶を慰めようとしたのだ、しかし逆効果だった

沙耶は涙を我慢するために上を向いた

「分ってる、分ってるわ、私の親は最高！！妙なことが起きたと分かったとたんに行動を起こした、屋敷と部下とその家族を守った！！凄いわ、凄いわ、本当に凄いわ！もちろん私のことも忘れてなかった、むしろ一番に考えた！！」

沙耶は感情の高ぶるままに言いたいこと言った

「それくらいに・・・・・・」

「さすがよ！本当に凄いわ！さすが私のパパとママ！！生き残っているはずがないから即座に諦めたなんて！」

「やめろ、沙耶！！」

孝はそう叫ぶと沙耶の襟をつかみ持ち上げた

「かは・・・は・・・っ」

みんなその場面を見て驚いていた

「あ・・・なによ、いきなり」

「お前だけじゃない同じ「・・・やめろよ・・・」

「えっ・・・」

「孝・・その手を除けろ・・・」

「えっ、先輩？」

俺はキレていた、孝のその行動に
そして孝にそう言ったのだ、しかし孝は沙耶を放そうとしなかった

「放せって言っただろう、孝・・」

俺は静かにそう言うと孝を殴った

「かはぁ・・」

殴られた孝は何が起こったのか理解できていなかった
周りのみんなもいきなりのことで驚いていた

「孝・・・お前に何がわかるんだ、沙耶の気持ちが分るのか？親にやっと会えたと思ったら死んだことにされてたなんて言われて、お前に分るのか、なぁ孝・・」

俺は殴られて倒れている孝を見下ろしながら問いかけるように言った
相手が孝だからこそ、俺は孝に分ってもらいたくて、問いかけるように言ったのだ
これが仲間じゃなかったら俺は怒鳴っていただろう

「それは・・・」

孝は俺の質問の返答にこまり、言葉が詰まった

「なぁ、孝・・沙耶の気持ち考えたら責めてる場合じゃないだろう？、仲間なら仲間が悲しまないように、泣かないですむようにしてやるのが仲間じゃねぇのか、なぁ？」

「・・・・スイマセン・・」

「謝る相手が間違っているだろ、それに分かったなら次から直せば良い、それだけだ」

俺はそう言って倒れている孝に手を伸ばした

「悪かったな、いきなり殴って」

「いえ・・俺も悪かったです」

「うん、それじゃあこれからについて話し合うぞ」

俺は皆の方を見て笑顔で言った

するとコータが窓の外を見て言ってきた

「？アレは？」

それを聞いた沙耶は窓の外を見ながら言った

沙耶は待ていたかの様に窓の外を見て説明し始めた

「そう、あれがこの県の国粋右翼の首領（ドン）！正邪の割合を自分だけで決めてきた男！私のパパよ！！」

自分の父親を見る沙耶の目は、悲しそうであり、怒っているようで

もあった

沙耶の家族Ｎｏ．４（前書き）

この話は前回投稿した奴を完全にて書きました＞＜
スイマセン＞＜
ずるいと思われますがスイマセン＞＜

沙耶の家族No．４

俺たちは部屋のベランダに出て沙耶の父親を見た
沙耶の父親は先頭を走っていた車から出てきた、その人が出て来た時、確実に周りの空気が変わった、何だか圧迫されているようなものだった

「すごいな・・」

俺は自然にそう呟いていた
何だよ、この圧迫感・・尋常じゃなぁ、沙耶のオヤジ・・・、面白れぇ・・・

「この男の名は土居哲太郎、四半世紀もの間共にかつ・・・・・・」

沙耶のオヤジは車から出て来たと思うと、いきなり凄いことをしたのだった
奴らになった友を屋敷の中の人の前で首を刎ねたのだった、自分の手で、自分の刀で・・・

「さらばだ・・友よ！！！」

その場面は他の奴らには刺激が大きすぎたのだろう、人々は口を手で押さえて泣いていたり、その場面から目をそらしている人ばかりだった
沙耶達もそうだった沙耶は目を瞑っていた、鞠川先生は口を押えて

違う方向を向いていて、恋夏は俺に抱き着いていた

「刀じゃ効率が悪すぎる・・・・」

最初に口を開いたのはコータだった

「決めつけがすぎるよ平野君」

冴子はコータの言葉に反論して答えた

「でも日本刀の刀なんて骨に当てたら欠けますし、3、4人切ったら役立たずに」

コータは焦りながら、冴子に言った

コータの言い分にも一理ある、しかしコータは刀を知らない、ああ言っても仕方ない

「たとえ剣の道であってもk「冴子、俺の刀を見せる、言葉より実物を見たせた方が良いだろ」

俺は冴子がコータに説明しようとしていたが俺はそれを横から声をかけて止めさせた

「あぁ、平野君も実物を見た方が良いだろう」

俺は冴子がそう言うと壁に立て掛けている刀を取りコータの目の前に行き、『斬龍』を鞘からから抜いた

「コータ見て見ろ、俺の斬龍だ、これで奴らをいくらか切った」

そう言って、俺はコータに斬龍を手渡した

「・・・・・・・・」

コータは真剣な目で斬龍を見た

「どうだ？」

「・・欠けてません・・・」

「そうだろ、斬龍は欠けてない、しかしどの刀でもこうはいかない、俺の力と斬龍が合ったんだ、違う刀だったら一太刀だけで欠けていたかもしれない、だからコータの言っていることは間違ってない、まぁ例外もあるってだけだよ」

俺はコータから斬龍を受け取り鞘に納めた

そして、コータに言った

「なぁコータ、俺や冴子、沙耶のオヤジさんは刀を使う、お前は銃を使うそれで良いじゃないか、別に銃が悪いって言ってんじゃないんだから、だからもしお前の銃をバカにして来るヤツが居たら俺に言え、そいつをぶん殴ってやる！」

俺はコータの方に向いてそう言い、みんなの方に笑顔で親指を立てたそれを見たみんなは俺に笑顔を向けてくれた

「じゃあ、みんなこれから俺は出発の準備をする、みんな俺と来てくれくれるか？」

「私はお兄ちゃんに付いていくって言ったじゃん」

「私も龍に付いて行くぞ」

「私も」「私も」「アリスも～」「僕も」「僕も」「私も」「ワン！」

みんなは俺に付いて来てくれることに決まった、それじゃあこれから麗の親を探しに行くとするか

「それじゃあ、みんな準備だ～！」

「「「「オ～！」」」」「ワン！」

掛け声と共にみんなで腕を持ち上げた

その後、一人一人の部屋に戻った、しかし麗と鞠川先生だけが部屋に残った

「アレ、鞠川先生準備しなくて良いんですか？」

「ううん、するわよ、ただ少し月夜君と話がしたくてね」

鞠川先生はベランダから外を見ながら言った

俺もベランダに出て鞠川先生の横に行った

「どうしたんですか？先生？」

「月夜君は強いのねって思って、ただそれだけ」

「俺が強いですか～、まぁ剣道してましたから、刀なら少し出来ますよ」

俺は鞠川先生の方を見て笑顔で答えた

「ふっふっ、やっぱり強いわねあなたは」

「はっはっ、先生も守ってあげますよ、絶対、俺は絶対仲間は守りますから」

「ありがとう、それじゃあ、私も準備しに行くわね」

「いってらっしゃい」

俺は鞠川先生の背中を見送るとベットで寝ている麗の方を見たすると麗から話しかけてきた

「先輩って優しいんですね、みんなが頼りにするわけだ」

「何だよ、麗まで？お前は早く背中の怪我を治せ、心配で困る」

「心配してくれてたんですか、ありがとうございます」

「まあな、ん、じゃ俺は出てくるわ、お前は寝てろよ？それじゃあ」

俺はそう言って部屋を出た

さぁ、何処に行くかな？そういやこの後って何があったんだっけ？

まぁ良いかとりあえずウロウロするか

そんなこと俺は考えながら屋敷の外をウロウロする俺だった

その途中、＜殺人病＞が何とか言っている集団にあったが俺はまだこんなことを言ってるやつ等も居るんだなぁ～と思いながら見ていた

「はぁ～、今日も空が綺麗だな～、まぁそんな事よりこの後の記憶

思い出さなきゃな、後々困るかも知れないからな～」

俺は一人でそんなことを呟くとまた歩きだした

沙耶の家族Ｎｏ．４（後書き）

アドバイスと感想まってます（泣）

沙耶の家族Ｎｏ．５（前書き）

この話は前回投稿した奴を完全にて書きました＞＜
スイマセン＞＜
ずるいと思われますがスイマセン＞＜

沙耶の家族No．5

俺は屋敷の庭を歩いていた

「君！！」

「えっ？」

いきなり後ろから声が聞こえてきた
その声を聴いた俺は後ろを振り向いた

「君！腰にぶれ下げているのは何だ！」

振り向いたところには、黒い服を着た右翼の人らしき人だった
その人は俺の持っている「斬龍」を指さして言ってきた

「おい！聞いているのか！？」

「は、ハイ！！何ですか？」

「だから、お前の腰につけている刀は何だ！子供がそんなものを持つんじゃない！」

あ、アレ？これ言われるのって、たしかコータじゃないか？俺に言われるのか？

「え、え～とこの刀は俺の刀です、俺の命を守る大切な刀です」

「そんなこと聞いているんじゃない！そんなものは私たち大人があ

ずかる！さぁ、貸しなさい！」

そう言うとその人は俺の前に手をだし、刀を預かると言い出した
しかし俺には刀を渡す気など毛頭なかった

「スイマセン、これは渡せません、俺の大事な物なので」

「何を言っている、早く渡しなさい！！」

男は俺の刀を無理やり取ろうとして、手を伸ばしてきた

「こら！」

「うわっ！」

オレは「斬龍」を取られたくないので男の手を避けた
しかし男もしつこく斬龍を取ろうとした

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！」

「うるさい！待ちなさい！！」

男が大きな声で叫ぶものだから、また右翼らしき人が俺の周りに集まった
その人たちも参加し俺の刀を取ろうとして来た

「待ってくださいよ！これは俺の刀ですよ～」

「渡しなさい！！」

俺が逃げ回っていると右翼の人たちも追いかけてきた
そして少し逃げ回っているとアリスちゃんが居たので走りながら助けを求めた

「アリスちゃん～！助けて～！」

「お、お兄ちゃん？」

「助けて～！お兄ちゃん！今ピンチなんだよ～」

「アリス、分った！みんな呼んでくる！！」

「えっ！？ちょっと、みんなに言わなくていいから！！」

アリスちゃんは俺の話を最後まで聞かずに走り出した

「ちょっと～アリｓ「待て～！！」

「なんで～！」

なんでこの人たちは俺の刀に執着するんだぁ～！！
そんなことを思いながら逃げているといきなり誰かに叫ばれた

「何を騒いでいる！！」

俺はその声に驚き走るのを止め、声のする方に向いた

「か、会長！」

先ほどまで俺を追いかけていた人達も声のする方に振り向きそこに

居た人を見て叫んだ

「どうしたんだ！」

俺が振り向いたところには腕を組み、立っている沙耶のオヤジさんが居た

「会長、この少年が刀を危ないから預かろうと言っているのに言うことときかねえんで」

「少年！名を聞こう！私は高城総一郎、憂国一心会会長だ！！」

沙耶のオヤジさんは凄い威圧感を放っていた

俺は自分の名前が聞かれたので姿勢を整え、自分の名前を言った

「月夜龍です！！」

「うん、声に覇気があるな月夜くん、ここまで来るのにさぞかし苦労したことだろう」

「あなたこの子は・・・」

沙耶のオヤジさんを一緒にいた沙耶のお母さんがオヤジさんに何か言うとした

「分っている、来ている制服で知れた」

「まぁ」

沙耶のお母さんは何かに驚いていた

何で驚いたんだ？この人は？不思議が？
俺はそんなこと考えながら、姿勢は崩さず綺麗に立っていた

「少年よ、どうあっても刀を渡さぬ気か・・」

沙耶のオヤジさんの目つきはさらにきつくなり、俺を睨んだ

「出来ません！これは俺の刀です！右翼の会長が言ってきてもこれだけは譲れません！この刀は俺の命を守ってくれる大切なものですから！！」

俺は大きく声を出して言った、俺の意見が沙耶のオヤジさんに分ってもらうために

「うむ、そこまで言うのなら私は何も言わない！その代り、その刀は手放さないことだ！」

「ハイ！分りましt「お兄ちゃ～ん！！」

「えっ？」

俺は驚いた、声がしたと思ったのもつかの間、アリスちゃんが俺の脚に抱き着いて来たからだ

「お兄ちゃん、大丈夫？みんな読んできたから大丈夫だよ！」

アリスちゃんは誇らしげな顔をして言ってきた

「はっはっ、ありがとうアリスちゃん、でも、もうお兄ちゃん大丈夫だから」

俺は足に抱き着いているアリスちゃんの頭を撫でた
そして俺が撫でていると、アリスちゃんが読んできたみんなが集まった
しかし、もう話は終わっているためみんな、集まった意味がなかった

「何なのよ～！いきなりアリスが泣きながら「お兄ちゃんが苛められてる～！」って言って来たから何ごとかと思ってきてみれば何なのよ？もう終わっているじゃない？」

沙耶は何もないことを知るといきなり愚痴り始めた

「お兄ちゃんが無事で良かった～」

夕夏は夕夏で俺に抱き着いて泣くし、麗は麗で心配して怪我してるのに出てきてくれるし
まったく困った奴らだ、すこし嬉しかったけど
でも夕夏、お前の胸に付いてるものを俺に当てるのだけは勘弁してください・・・理性が持たない
その後、原作道理にコータがアホみたいに持っている銃のことを言われたが、沙耶や孝の意見で持っていても良いことになった
その間、俺の脚にはアリス、前には夕夏、何でだろう？意識がだんだん遠のいて行く・・・・・・・

「バカ！」

えっ？殴られた？
俺の頭に何かがぶつかった、そしてそれは痛みにだんだん変わっていった
痛みを我慢して殴った奴を見てみると何故か顔が怒っている冴子が

木刀片手に俺へ殴りかかろうとしている所だった
そして次の瞬間、見事に殴られました

「何で殴るんだよ～！」

俺の疑問は大きな叫びと共に口から排出されたのだった

沙耶の家族Ｎｏ．５（後書き）

皆さんご感想をください
お願いします
修正点なども教えてください m（__）m

お知らせ？これからの自分のあり方

スイマセン＞＜
この話は小説と関係ありません＞＜
これからこの小説がどうなっていくか書いたものです＞＜

この小説はアホな自分が書いているので投稿もなかなか出来なかったり、投稿しても駄作かもしれません＞＜
（この前にたいに・・・・）

でも駄作は自分でやっぱり駄目だと判断した場合、修正して全然違う話になるかもしれません
１７、１８、１９話みたいに（，＿、。）グスン

でもその時は暖かい心で「ダメだったんだなぁ～」と思ってください（，＿、。）グスン

ではこの先もこの小説をよろしくお願いしますｏ（＊＾▽＾＊）ｏ～♪
出来れば、感想、ご意見お願いします（。ー＿ー）ノ☆・。：：。
ヨロシク♪
評価をしてくれた人は感謝しますｏ（＊＾▽＾＊）ｏ～♪

ではでは、これからもどうか自分を見捨てずにこの小説を読んでください（＃＾．＾＃）

沙耶の家族Ｎｏ．６（前書き）

文才がありませんがよろしくお願いします♪

沙耶の家族No．6

「何で殴ったんだよ、冴子！？」

「別に理由などない！龍の顔が気に食わなかっただけだ」

「何だよ、それ～！」

「まったく、あなた達は仲が良くて羨ましいわ」

沙耶の母親は俺たちの会話を聞きながら微笑みながら、そう言った

「沙耶ちゃん、良かったわね、良いお友達が一杯できて」

そう言うと沙耶の両親はどこかに行こうとした、しかし、右翼の人が沙耶のオヤジさんに話しかけた

ここからでは何を話しているか聞こえなかった、しかし、右翼の人は神妙な顔をしていた

そして、その話はすぐに終わった

すると、沙耶のオヤジさんが俺たちの方に、また戻ってきた

「沙耶、お前に頼みがある、あの人たちと話してきてくれ」

沙耶のオヤジさんは沙耶にそう言った

そして、オヤジさんは詳しいことを沙耶に話した

「何で、私がそんな事をしなければ、いけないのよ！！」

沙耶はオヤジさんの説明が終わると、もう反発した

まぁ、そうだ、いきなりそんな事言われても意味が分からない、自分がする必要があるのだろうかと思うだろう

俺はそう考えながら沙耶達を見ていた

「わが娘は語らねば分らぬほど愚か者ではない！」

沙耶のオヤジさんは何故か偉そうに沙耶に言った

「沙耶、ママからもお願いするわ、あの人たち私たちが行ったら、警戒しすぎてしまうもの」

「い、一緒に僕も行きます！」

「僕も付き合うよ！」

コータや孝も言い出した、これでは沙耶は断ることは無理だろうと俺は思った

「じゃあ、俺も行こうかな～」

孝たちも行くなら俺も行こうと自分から志願した

「いや、少年！君には付いて来てもらう、それと、毒島先生の御嬢さんも少し私に付き合ってもらいます」

「あぁ、そうですか・・・」

俺は少し落ち込んでいた、沙耶と一緒にあいつらとの会話を見たいと思ったからだ
恋夏は俺の方向を見て、悲しそうにしていた
何で今にも泣きそうな顔をするんだ、恋夏！
そんな事、少し思っている俺だった

その後、俺と冴子は沙耶のオヤジさんに連れられ、オヤジさんの部屋らしきところに来た
そして、俺と冴子は畳に腰を下ろした

「まず、君たちをここに来てもらったのは理由がある」

「何でしょうか？」

「うむ、それはまず君だ、月夜龍と言ったかな？君を呼んだ理由はその刀だ」

「刀？『斬龍』のことですか？」

「名前までは知らんが、君からは計り知れない覇気が出ている、そんな少年がどのような刀を使っているのか興味が湧いてきてな」

「はぁ、そうですか・・・」

「でだ、見せてくれないか？少年？」

「はい、良いですよ、どうぞ」

俺はそう言うと座るときに横に置いた『斬龍』を手に取り沙耶のオヤジさんに手渡した

「うむ・・」

オヤジさんは俺の刀を手に取り、頷くと刀の鞘を見始めた
そういや、俺の刀って誰が作った刀なんだ？神様？それとも二次元の人？分らねぇ～
俺はそう考えながら、オヤジさんが刀を見終わるまで待っていた
沙耶のオヤジさんがこの後、刀を鞘から抜いて見るまで5分はかかった

「うむ・・」

またもやオヤジさんは頷いた、そして刀を鞘に納めて俺に返した

「どうでしたか？」

「私は、その刀を今まで見たことがない、少年珍しい物を持っているな？どうしたんだ、それは？」

「スイマセン、それだけは言えないんです・・他の事だったら言えると思いますので」

俺はオヤジさんの質問を丁寧に断った
無理だよなぁ～、神様から貰ったでもいうのか？無理だ、無理だ、絶対に可笑しい奴だと思われる

「そうか、すまない、ではもう一つだけ聞こう？」

「その刀は何時使う気なのかね？いつまでも使わない訳にはいかないぞ」

沙耶のオヤジさんは至って真面目な顔でふざけた質問をしてきた
使わない？うん？俺は「斬龍」を何度も使った

「スイマセン、何かの冗談でしょうか？この刀は何度も奴らを斬っていますよ？」

「何だと！？」

オヤジさんの顔は一層、怖い顔になった

「何度も使った？奴らを斬ったのか？本当に？」

「えぇ・・何度も・・・・」

俺は何だか気まずそうにそう言った

「すまない、もう一度その刀を見せてくれないだろうか？」

「え？ハイ！」

俺はもう一度オヤジさんに刀を手渡した

「・・・・・・・・」

オヤジさんは熱心な顔で、食い殺さんあまりの目力で刀の刃を見た
そして、刃の端から端まで見たところで口を開いた

「では、なぜこの刀はなぜ、ここまで刃が綺麗なのだ！？まるで何も切っていないような刃ではないか！刃こぼれ一つなければ、血油一つ付いてない・・」

「そういう刀なんですよ、自分の『斬龍』は」

俺はその一言だけ言った

「そうか、凄い刀なのだな」

オヤジさんは少し笑うと、刀を俺に返した

そして、オヤジさんは後ろを向き、一本の刀を自分の目の前に置いた

「少年の刀を見てからだと、軟な物かもしれないが」

そう言うとオヤジさんは刀を持って、冴子に渡した

「これをどう見る！」

冴子はその刀を着物の袖を伸ばし袖で受け取った

それを見ていた俺は一つ疑問に思ったことが頭に浮かんだ

俺って、いつまでここに居れば良いの？もう俺の話終わったよね？

まぁ、でもここで帰ったら冴子に後で殴られるかな？

そんなことを考えながら座っている俺だった

やばい、足の神経が感じなくなってきた・・・・

そんな無駄なことをも考える俺だった・・・・

沙耶の家族Ｎｏ．６（後書き）

誤字脱字なのがありましたら、お知らせください

感想、ご意見待っています

よろしくお願いします

沙耶の屋敷Ｎｏ．７（前書き）

こんにちはｏ（＊＾▽＾＊）ｏ～♪
今回は更新が少し遅れてしまいました＞＜
まぁ、決まった日程はないのですが一週間に一回は投稿したいと思っています＞＜
これからも登校が遅くなるかもしれませんがよろしくお願します＞＜

沙耶の屋敷Ｎｏ．７

俺は沙耶のオヤジさんに刀を見せてから足がしびれてきたので俺はその場から席を外した

「あぁ、足が、足が・・・痺れて・・うぅ・・」

俺は痺れた足をかばいながら歩いてある部屋に向かった

コンコン

俺は部屋のドアをノックした

「お～い、開けてくれ俺だ」

俺はそう言ってドアの前で待った

すると部屋のなかで何か凄い音がした、そしてやっとドアが開いた

「ど、どうしたのお兄ちゃん？はっはっ」

俺が来た部屋は妹の恋夏の部屋だった

「うん、少し恋夏が気になってな」

俺はそう言って恋夏の部屋に入った

そして俺は部屋のソファーに腰を下ろした

「なぁ、恋夏？・・・・・・お前はどう思う・・」

「どう思うって？」

恋夏は不思議そうに顔を横に傾けた

「親のことだよ、俺達の・・・・」

「・・・・うん・・」

恋夏は急に悲しそうな顔をした

やっぱりか、恋夏は親のことを考えないようにしていたんだ、それも仕方ないだろう考えたらキリガない俺もそうだろう

「恋夏に言うのを迷ったが言わなきゃいけないなと思ったんだ」

「うん・・・・・」

「今から、俺たちの家に行くのは無理だ・・理由は分るよな・・」

「うん・・ここと真逆の方だからでしょう？」

「そうだ、でも俺はまだ父さんや母さんが死んだとは思ってない、どこかで絶対に生きている、そう信じている」

「うん、私も信じて・・でも・・」

恋夏は手で顔を隠した

たぶん恋夏は泣いているんだろうと思った

「おいで恋夏」

そういって、俺は恋夏を抱きしめてあげた

「お兄ちゃん、お兄・・・」

恋夏は声をあげて泣いた、それだけ溜まっていたんだろう
俺はそん恋夏を優しく抱きしめてあげていた

すると誰かが恋夏の部屋を訪れた

コンコン

「恋夏お姉ちゃんいる？」

部屋に来たのはアリスだった、その元気な声ですぐに分かった
しかし、アリスはノックまでしたのは良いのだが中に居る人の返事も聞かずに入ってきてしまった

「あぁ！！お兄ちゃん達エッチな事してる！！」

アリスは入ってきた早々、俺達を指さして変なことを言い出した

「ちょっと、アリスちゃん何言ってんの！これはお兄ちゃんが恋夏を慰めていt「あっ！アリスちゃんに見られちゃった！私とお兄ちゃんのエッチな事」

恋夏はわざとらしく驚いてみせた

「ちょっと、恋夏！？何、言ってんだ！誤解をうmと言うか恋夏泣いてたんじゃ？」

俺が恋夏を見るとケロッとしていた、もう泣き止んでいたようだったまったく、こう言うことになるとやけに元気になるんだから
俺はそんな恋夏を見ながら微笑んでいた、しかしその微笑みのすぐに消えた・・そうある一言によって

「あんた、何大きな声あげて？」

そう言って、部屋に入ってきたのは沙耶だった、沙耶はアリスの声を運悪く聞きつけ俺たちが居た部屋にやって来たのだ

「あっ沙耶ちゃん、今ね、お兄ちゃんとお姉ちゃんがエッチな事してるn「ちょっとアリスちゃん間違った情報を沙耶に言うんじゃってうわっ！！」

俺はアリスの間違いを正そうとして動いた、すると恋夏が以外にも強く抱きし付いていたので俺は恋夏を抱きしめたまま後ろに倒れてしまった
するとだ・・・まぁあの有名な体制になり俺と恋夏が変な事をしているみたいに見えるのだ、そしてそれをまた運悪く沙耶は見たと言うかガン見ですよ、うん！
そして予想通り

「な、何してんのよぉぉぉ〜〜！！！」

沙耶はそう叫んだ
そしてここまでは俺の予想通りだった、しかし次の瞬間・・・

バシ、ドカッ！！グシャ！

あ、アレ？おかしいな？何だろうこの赤い液体？はっはっ目の前にピンク髪の悪魔が見える・・・・

って！冗談を言ってる場合じゃない、沙耶殴られようがこんなところを他の誰かに見られては・・・・・・

「「「「ジー」」」」

メッチャクチャ視線感じる～～！！！！！

俺はその猛烈な視線に振り向くこともできずに、ただ沙耶に文句をごたごた言われている俺だったのだった

まぁ、予想だけどあの視線の中には冴子は居なかったな

恋夏から解放された俺は急いでその場を離れたのだった、そして今はゆっくりと廊下を歩きながらそんな事を考えていたところだった

冴子が居なくて良かったなぁ～、いたらどうなっていた事だろうか？考えただけで恐ろしいな・・・・

そんな事も考えている俺だった

そして、その頃の冴子は沙耶のオヤジさんとの話も終わり部屋に戻るところだった

すると、冴子と同じ廊下を歩いていたアリスが冴子を見つけてあの事を言ったのだった、勘違いしたままで

「あっ！冴子お姉ちゃん！！あのね、あのねさっきね！お兄ちゃんが恋夏お姉ちゃんとエッチな事ことしてたんだよ！」

アリスは悪気もなくそんなことを笑顔のまま言ったのだった

「うん、アリスちゃん？それはホントかな？」

「ウン！」

アリスがそう頷くと冴子はアリスに礼を言い、自分の部屋ではない所に向かった

「先ほどもらったこの刀、切れ味はどれくらいの者だろうか？フッフッ・・・・」

冴子はそんな独り言を言いながら黙々と歩いて行ったのだった・・・

沙耶の屋敷Ｎｏ．７（後書き）

誤字、脱字がありましたらご意見ください
おかしな所がありましてもご意見よろしくお願いします
感想も待っていますｏ（＊＾▽＾＊）ｏ～♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2287o/

全てを捨てて学園黙示録へ

2011年8月16日07時20分発行